大正期の森田草平

根岸正純

(1971年10月30日受理)

Sohei Morita's Life and Works in the Taisho Era

MASAZUMI NEGISHI

1 「初恋」の女との再会

「煤煙」(明42)は，新しい恋愛体験を実現しようとする意志的行動が先行し，その行動の跡を追尋するところに成り立った作品である。その作品化のいとなみそのものも含みこんだ，やや衰弱した行動を先行させることによって，更に「自叙伝」(明44)を産み出したのである。彼の僚友・生田長江は，草平を評して，彼の要求の第一は生活を詩的に営もうとすること，第二はその生活を詩的に告白すること，としたが[1]第一の要求の性急な先行に，草平の特質を見なければならない。長篇の作としては以上に続く「十字街」[2]も，同じ路線の上に立ったけれども，先行すべき行動の目標，つまりは恋愛の対象を持ち合わせていなかったために，所詮空洞化した作風を示すことになった。また上記二作のように，実際の経験にもとづいたものでなく，個々の場面はともかくストーリー全体としては架空の作の疑いもある。

以上の三作に対し一方で草平は，これら長篇作品に平行して，傾向を異にする短篇の作をも試みている。その中には，妻・さくが踊りの師匠をしていたのが縁で，かなり情趣の豊かな芸ごと小説ともいうべき一連の作もあるが，みずからは手中にしていない心の結び合いの渇望・探索が底流していた。いずれにしても，意志的行動の先行を前提とする創作の姿勢が，骨格をなしており，従って周辺に位置する諸短篇が示した別種の可能性——行動体験の前提なしにおのが願望を造型するような方向では，見るべき収穫をあげることができなかった。

草平はひそかに，「煤煙」の恋のような，激しい恋情の燃焼の再現を夢見ていた。にもかかわらず，「十字街」の前後は，恋情の対象との出会いを欠いた空白な月日を，はじめて経験していたのである。こうして新たな行動の端緒をつかみかねていた草平は，遙かな少年の日に思いをよせた女性に再び夢をかけるようになった。つまり，恐らく彼が13才の頃ひそかな思慕をいだき，やがては馴染を重ねたこともあるらしい，かっての岐阜金津の遊女——小説「初恋」(明44)に田毎の名で登場する——の所在を探り，15年前後の歳月を隔てて再会することを願ったのである。幼な心に愛慕した遊女が余儀なく身受けされて北海道のさい果ての地に過したはかなげな境涯を思い，また10余年振りのドラマチックな再会を空想したとき，無性に心のそそられるものがあった。女の所在を知った経緯・時期は未詳だが，前記「初恋」を明治44年12月の「中央公論」に掲載し，更に翌大正元年9月に短篇2作を加えて春陽堂から「現代文芸著書15」として作品集「初恋」を単行出版したのが機縁となったのではあるまいか。小説中では，手を尽して住所をつきとめた(「女の一生」)とも「偶としたことから」聞き出した(「女の良人」)とも書いている。

作品から想像すると，昔の変人の面影を求めて北海の地を訪ねることにロマンチックな思

いをかき立てていたが，当の婦人は3年来名古屋に移住していることがわかり，興味は半減した。しかしともかく名古屋で再会する手筈を整え，大正元年（草平31才）10月10日イブセンの「鴨」を訳了すると[3]，その翌々日岡崎へ向って出発した。岡崎では講演の依頼も受けていたらしく[4]，また「岡崎在」の僧侶・安藤現慶氏の許を足場にしようとしたのである。同氏の住寺・本楽寺は安城市（当時，安城町）赤松だが，草平は「岡崎（在）」といいならわしているので，以下それにならうことにする。安藤氏との交友は伊藤証信を介して始まったもので[5]，草平にいわせると「感激性に富んだ，一寸風変りな坊さん」で「何う云うものか，大いに私（＊草平）に景仰の情を寄せ」「買い被つて」いて，草平の紹介で漱石の門にも出入した[6]。

草平は出発に当たって小宮豊隆に次のように書き送っている。

> 僕今夜函嶺を越えて所謂アドベンチュアに行く。近頃の平凡の気を脱する思ひだけはして居る。毎日の感想を君が邪魔でなくば送らうと思う。特に十五，十六日のobscuredaysに於て　時に今日万年筆を買つて大いに want を感じて居る。（下略）（藤沢にて，10月12日付絵ハガキ）

この文面から，小宮豊隆には委細を語っていたのが明らかである。また「アドベンチュア」の語を用い，「平凡の気を脱する思ひ」といっているのをみると，彼がこの再会行に，生活・文学上の進境を期していたのがうかがわれるが，同時に再会予定の日を意味するらしい，「十五，十六日」を「obscure days」と呼んでいるところに自己の行動の意味のあいまいさを自認した一面が感じられる。女との面会の前後に，岡崎では芸者を上げて酒席を重ね，あるいはその手を携えて遊山を試みるなど，「連流荒亡を極むる事一週間」（豊隆あて10月20日付ハガキ）の日々を過し，つづいて岐阜へ脚をのばした。

肝心の再会は，女が突如岡崎に出向いただめ同地で実現した。その結果については，15日夕発信の豊隆あて絵ハガキの全文が余すなく伝えている。

> 会つた，而して予定の如くdisappointした，僕は最う，リイベも要らんパッシヨンも要求しない。女は只youngで beautiful であれば可い。それでなくば永く対座するに堪えんよ。此処に至つて大に君の遺方を羨しく思つて居る。

「初恋」の女との再会と失望とは草平の文学にゆるやかな旋回を余儀なくさせた。というよりも事実はむしろ，豊隆あてのハガキに「予定の如く」というように，草平は自身の予感の確認を半ば意図して，再会の旅に出立したというべきかもしれない。従ってこの岡崎行を題材とする一連の作は，「煤煙」以下の長篇の諸作のように，先行した行動の中に埋没して遮二無二それを拡張して見せようとするものではなくなった。また,傍流の若干の短篇や「十字街」の一面に見られるように，長篇における方法の裏返しとして，無媒介に客観的な仮構を試みたりすることも少なくなった。

岡崎行に関連して書かれた作には，「女の一生」「三代目小六」「岡崎日記」「女の良人」の4篇があり，いずれも大正2年（草平32才）1～5月の間の発表である。まず「女の一生」（「文章世界」大2・1）は，冒頭に「こんな手紙が路傍に落ちていた。」，末尾に「此手紙を出した主の名も，貰った女の名も千断れてなかつた。」の各1行を配して，書簡の体を借りた作品であり，手紙の主の男が15年振りに女に再会した経緯・場面・心情が綴られている。手紙の主の「私」は，「『一度会つて見たかつたから会つた』と云ふ外に返辞の仕様がない」のであるが，その背後には，相手の「お前」を，「私のために生れて来たと思はれるやうな女」と思いつめると共に，「甲の間違ひに代ふるに乙の間違ひを以てする」「最近三箇年の生活」の「煩はしさ」からのがれようとして,「何うせ希望のないものなら，知らぬ未来よりも，慣れた過去を繰返して見たい」気持がひそんでいた。また15年も会わない，という「興味」や，「初恋をした女」・「童貞の誠を捧げて恋した女」が「此世の何処かに生きて居る」という感

傷が胸の底にひそんでいた。これらの心情には，類型的な情緒に刺戟源を求める草平年来の行動のパターンがあるが，もはや過去におけるように，行動にもその作品化にも，「アドベンチュア」の期待に反して，未知の領野を探索する緊迫さを失い，過去の相似形を眼前になぞる結果になっているが，そこに草平の方向転換の胚種も宿っている。

出会いの場所は名古屋の予定が岡崎の宿となり，翌日は弁天島に遊び，更に次の日は再び岡崎で一夜を過した。再会の印象は，豊隆にハガキで報じた文面と全く合致する。

> お前は手を突いてきちやうめんな挨拶をした。それから顔を上げて私を見返した。十五年会はずに居たのは，お前が十五年歳を取つたと云ふことなんだね。お前は歳を取つて居たよ，顔ばかりぢやない，形にも姿にも歳を取つて居たよ。殊に堪らなかつたのは，其声だよ。

おまけに「下等な生活に労れて居る」顔，「目に見えぬ暗い影に脅かされて」いる「罪人の顔」をも見出したのである。やがてその暗さは，脅迫から逃れるために急拠渡道したり，未だにその恐怖におびえているためだったことがわかる。「私」は不快さを糊塗するために弁天島に誘うが，最後に名古屋で落合う約束が行き違いになると，もはや重ねて逢うことは断念してしまう。

この再会と失望には，新しい問題提起も高まりも乏しいが，その緊迫性の稀薄に即応して，作品としては気負いのない傍観の態度を示し得た点に長所がある。また作者が半ば予期したとはいえ，それを上廻る失望を味わい，その背後に思いがけない女の悲運を知ったという主題を通して，受動的に外界を受け入れる視座を強いられたことに，より大きな意味があろう。概して主観的な情緒を発条にして行動を追い求めてきた草平にとっては，こうした認識と制作との方法を中心点とする位置に移行しはじめる契機となったのである。

他の3篇も，ほぼ同じ方向を辿っている。「三代目小六」(「太陽」大2・1)は直接「初恋」の女を登場させてはいない。日本に遊学している若いロシア人[8]の宅で催された茶会の席上，参会者のひとりが語る旅行談が主体になっており，その語り手は明らかに草平がモデルである。そして中心の話柄は，名古屋の女郎屋で六代目小六を名告る遊女に会い，代々の小六が同じ部屋に住んだとわかって，三代目小六の記憶を聞き出そうとするところにあり，その三代目が実は「初恋」の女であって，前記の「女の一生」でも同じ題材にふれている。しかしこの作の基調を，前作同様の体験の傍観に求めるわけにはゆかない。もっと軽快なタッチで書かれ，わずかにユーモアも漂っている。茶会の話題がドン・ファンから男女混浴に移り，その間東西両洋の恋愛比較の論議に花が咲いている折から，話手の男が遅参しやがて旅行談をはじめる導入部は，芥川の手法を連想させる面白さもある。しかし旅行の途次G市（＊岐阜）で邂逅した旧友や同車した老優の登場は主題との脈絡が乏しく，三代目小六に関するエピソードも，客を恐れさせるために灯油をなめたという話題（「初恋」にも出てくる）のみでは，全体として散漫たるを免れない。だがいずれにしても，題材の中に埋没しないゆとりを持ち，さまざまな人間と生活の断面に着目しはじめた点では，「女の一生」と共通するものがある。

「岡崎日記」（「新小説」大2・2）の主人公・水島要は明らかに草平をモデルとするもので，「初恋」の女との別離の翌日から4日間，岡崎とその近郊に過した要の動静を綴っている。半ば予期したものの，再会に失望した要はわれとわが傷心をいたわる気持がある。彼が止宿し世話になっている寺の住持にも，「女は只若くて美しくさへ有れば可い」と嘆く。心を遣るすべもない中で，秀松という芸者に心を惹かれる。彼女には連日呼び出しをかけ，2日目には義太夫語りを訪ねるのに西尾・新川まで同道させた。しかし彼女への興味は「多少鼻ッ張の強い所は有つても，矢張周囲の影響に化せられた女」とか，「類型的な女だとしても類型的な女を実際に見るのは珍しい」といった類である。こうした女性観は草平年来のものだ

が，それを行動への情緒的契機とした従前のそれとちがって，平静な観察の態度に変貌している。もっとも要は，ふと「何とも言はれぬ寂しい心持」に襲われ，「誰でも可い，人の顔が見たい，人の顔が見て居たい」という渇望を綴るくだりもあるが，一方では，西尾へ行くべく，秀松を待っているときに，

一人で女を待つ心持は，要もおぼえのない身ではない。が，如何云ふものか，自分でも可笑しい程興奮して居た。

とあるように，自己を劇化しそこに醸成される情緒を楽しむ過去の姿勢の残像を客観しつつ結局そこから剝離しはじめている。従って「果敢ない者の型だけを繰回さうとして居る」と自省し，秀松と過した数日を「内容のない男女の密会」と自己批評するまでになった。更に要はイブセンの「鴨」——岡崎行直前に草平が訳了したことは前述——の中で，物置に鴨を飼って過ぎし日の壮大な鴨猟を追想する失意の老人エークダルに自身をなぞらえる程に，自己観察を定着させたのである。

それはともかく，ヒロイン・秀松のイメージはあいまいであり，充分に描き切れていない。この芸妓はおそらく，前出の豊隆あてハガキに「連流荒亡を極むる事一週間云々」のあとに，

妓あり名は栄之助，吉左ェ門の崇拝者なり，顔附引締りて全く江戸前の芸者なりそれで居て岡崎弁を使ふんだから嬉しくて堪らない。

とあるのがそれであり，ハガキの叙述の方が余程鮮明である。

「初恋」の女に関連のあるいまひとつの作品は「女の良人」（「太陽」大2・5）である。主人公・辰己は33才，「異性に対する興味を失ふ時代が来」て，「ラヴ・キャーリアに入るのが早かつただけに出るのも早かつた」と感ずる。そして情熱の残り火をかき立てるよすがにもと，「昔別れた初恋の女」に17年振りで会って失望しているという冒頭部は前記3作と全く同巧である。辰己は「孤独を求める傾向」に陥り「劇烈な不眠症を伴つた」。そんな折から，一旦ひかされていた昔馴染の芸者で，再び座敷に出るという一枝から誘いの手紙が来る。彼女が「男に捨てられた女」「男の味をおぼえた女」だと思うと心を惹かれて会いに行く。このような心情は，「棄てられた女」（明38）・「狂言」（明44）・「十字街」（同）にも見られ，しかも積極的な行動の動機となっていた。しかしここでは，結局前述の作品同様，他者の辿る運命に関心の中心があって，先ず一枝の身の上を語ることにスペースの半ばをさいている。次に末尾に近く，怪しい男が辰己に付き纏い遂に彼の家に訪ねてくる。彼は「初恋」の女の夫だが，女の急死を知らせ，また妻と辰己との関係を知悉しながら，非難を浴びせるどころか，涙ながらに謝意を表し，女に送った辰己の手紙の包みを置いて立ち去る。数日後，辰己は警察署へ同行を求められ，電車に接触して負傷入院した男が，辰己のほかに東京の知人がない旨を申し立てているという。それは「初恋」の女の夫だったというのである。——ここでも薄幸な夫婦の運命に目を注ぐことが主体である。

草平の岡崎行とそれに材料を得た以上4篇の作品は，それほど鮮明ではないにせよ，彼の文学の歩みに一転機を画したものである。従来の草平の文学が，行動を先行させながらそれとからみ合う制作であることはしばしば述べた。仔細に見れば，「煤煙」における高揚は次第に沈静して，「自叙伝」以降になると，一方で，現実を顧みて感慨にふけり詠嘆する姿勢がないではなく，でなければ一挙に仮構の手法を試みもしたけれども，上記の第1作「女の一生」は，それらともちがって傍観的に観察・認識する態度が芽生え，しかもその対象を他ならぬ自己の体験に求めたのである。というよりも，自己の直接の体験と共に，見聞の体験をもひとしなみに対象とするところに特質があった。彼の身の上に思いがけなく開顕される現実の諸相には，彼自身に端的に波及するものであろうと，見聞の域にとどまるものであろ

うと，本質的な差異を認めなかった。次作「三代目小六」以後では，むしろ後者の対象の方が比重を大きくしたくらいである。要するに，自己の観念や情緒で彩りながら強引に繰り出した行動的な体験をではなく，パッシヴに外界を受け入れる体験を叙述する方向に転回しははじめたのである。そこで草平は，「岡崎日記」では彼の自画像である要ばかりでなく，芸妓・秀松に対して，「女の良人」では一枝やお粂（「初恋」の女）夫婦に対して，あたかも自身のそれと同じ比重で彼らの運命に凝視の眼をむけたのである。「三代目小六」で，主題とのかかわりの不可解な旧友や老優を登場させたのも，彼らの運命の転変に対して自己に対するのと等量の関心をいだいたからに他ならない。

しかし自他の体験のパッシヴな受容にとどまった以上，積極的に人間の本質を摘出し組み立て造型する場所に到達したわけではない。また一面で行動と芸術との激しいからみ合いを失っているために，彼の文学制作が生の格闘の場所という性質を稀薄にしたことも事実である。こうして彼の文学は経験や自己中心的な見聞による収穫といくらかの自省的な断想を記述するものとなり，かなり消極的な性格を帯びることになった。一口でいえば，草平はかっての行動の場から，消極的な認識の場へ移行したのである。

だがともかくも行動よりも認識に移行したことから，初心に帰ってデッサンの修練を志し，写生文への関心をもつようになる一方，具体的描写と思考の叙述との熟合しないままに，文学をそれらの無雑作な記述の方便に下降させてゆく。そこには創作への自信喪失も介在するが，一面では作家として自覚を保持しつつ日本の文壇には求め難い文学的渇望を外国文学に医しながら，眼高手低の欠落感を充たそうとする姿勢があった。

同時に，草平の文学的態度は，認識本位の広がりの中に拡散され，小説への集中が弱まって，逆に思考の表現を評論・随想に託する場合が多くなり，社会の現実的諸相への対応は巾広くなっていった。同時に自己に執着する求心的な格闘から身をふりほどいていった結果，彼の思想やモラルは常識的になりプリミティヴな次元に逆戻りした傾向もある。それが通俗小説に筆を染める由因でもあった。以上が，「初恋」の女との再会行以後，つまりは大正期にはいってからの，草平の変貌の概略といってよいであろう。

しかし草平が明治・大正の交に，全く過去と断絶したのでないことは勿論である。本質的にはむしろ過去の継続を認めねばならない。「煤煙」をピークとする明治末葉の彼は，ある意味で行動の噴出としての文学の制作に従い，作品の自己充足的な成形を困難にした。もしくは，明確な自覚が無かったにせよ，そうした成形を避けたといってもよい。そして，そのことによって，自己流出あるいは自己崩壊めいた生の在り方を持続したのである。このような根源の姿は，大正期の変貌の後も変わっていない。つまり拡散化された，どのジャンルやどの部位においても，成形や斎合を意図せず，自壊的な生の感覚を修正することはなかった。作家である以上，目鼻立ちの整った作品を生み出すのを上乗と見なす立場からいうと，作家としての成功を回避することによって独自の作家的自覚が維持されるという悪循環の中を，彼は依然として歩んだのである。大正期に及んで拡散的になった変貌自体もそこに含まれるだけに，尚更彼における作家としての不幸は倍加されたといえるであろう。

*

「初恋」系の4篇の前後に別種の作品もある。「妾」（「新潮」大2・4）では，先ず冒頭に

> 作者は今念入りに此小説を書き上げるだけの暇を与へられない。で，止むを得ず略方（あらかた）の筋と，其時々の心持を暗示するだけに止めた。

などとあって，内容と表現との一体化を願わず，作品が記述の具と化しているのを物語っており，前述した小説形態の破綻を自認する端的な例である。しかし題材は作者の経験そのま

まではなく虚構性が強い。美術学校生徒・水野小一郎は下宿に同居する老女主人の姪で年上のお類にひかれ，深い関係をもつにいたる。ある日，お類の制止をきかずに奪い取った守り袋から出て来たのは，稀に来訪する静岡の代議士・野々宮が与えた「約定のこと」なる紙片で，お類が妾だったことがわかる。小一郎はお類を人妻と思えばこそ「不安」と「遊びの心持」を楽しんでいたが，妾とわかると「地味な真面目な話」になり「身の詰るやうな気」がする。野々宮は病気で辞職しお類とは手が切れたも同然となる。そうなると「小一郎は何だか張合の抜けたやうな気がして，座蒲団の上へ尻を落した。」というのが結末である。同居の男が既婚の女とダルな痴情にまみれてゆく話題は，草平自身の経験にも近く，「仮寝姿」(明36・7)や後述の「下画」（大3・5）にも扱われ，草平の好むシチュエーションであって，「煤煙」以前の作風の再現の観もある。ただしこの「妾」では，そうした愛欲に埋没した姿勢ではなく，スリルを失って拍子抜けする心理の機微をとらえ，体験や見聞をこえた造型の一面をのぞかせている。

「妾」と同じ月に，戯曲「袈裟御前」（「中央公論」大2・4）がある。草平は自筆年譜に，「煤煙」以後の短篇中，漱石の「お褒めに預」った「初恋」と共に，これを「比較的自信ありたる」作と自任している。遠藤盛遠は19才の暴勇の武士。奉行をつとめた架橋工事が落成して橋供養も終えた夕暮，幼馴染でかねて思いを焦がしていた袈裟御前を見かける。しかし彼女は母（盛遠の伯母）・衣川の意向で一門の渡辺左衛門尉亘に嫁していた。奉行の任務も終り袈裟に出会った盛遠は妄執にわかに燃え立ち，衣川の住家に現われて，袈裟と逢瀬の機を与えるよう強要する。折から訪ねて来た袈裟は夫・亘を殺すよう盛遠としめし合わせる。盛遠は亘の邸宅にしのび入り袈裟の指示に従って首級をあげるが，灯篭の灯影が照らし出したのは袈裟の首だった。――作者が自任するだけあって，草平らしい澱みが少なくアーカイックな台詞の措辞も巧みで，戯曲としてのまとまった体をなしている。ただし冒頭の橋上の2匹の蛇は伏線として有効に照応せず，袈裟の首と知った盛遠の衝撃も盛り上がりに乏しい。次に鈴木悦が，登場人物は「型通りの性格」であり，「古臭い貧しい内容」しかもっていないと評したように，[9] 二夫にまみえるのを拒んで覚悟の死を遂げる袈裟御前は浪曲的モラルを体現している。草平の文学的旋回がこのような通俗的道徳への後退につながったことは，既に見た通りである。しかし盛遠の妄執と袈裟御前の自己犠牲的な選択とは二つながら，草平の自己破壊的な志向と無縁ではなかった。ほぼ3ヶ月後の読売紙上の小文「たは言」[10] に，

> 利己主義（ニゴティスム）と正義（ジャスティス）の観念を基礎としたやうな，新しい道徳には耐へられない。矢張旧い道徳の信者である。愛（ラヴ）と犠牲（サクリファイス）との道徳でなければ一日も安住できない。

とあるのも，上述の諸点と照応している。ここにいう正義とは自己正当化を意味し，狭義の利己主義ばかりでなく，破綻のない自己形成や自己弁護への嫌悪を背景にしているにちがいない。一方，愛と犠牲の主張には，自懐的な志向の色合を帯びている。なお，芥川「袈裟と盛遠」同様，源平盛衰記が原話だが，盛遠の文覚への再生にふれぬ点に第一の困難があった。

「狂犬」（「中央公論」大2・6）は，飼犬が狂犬病で死ぬ出来事を描いたもの。翌年の随筆「岡崎より」（「反響」大3・9）に「自分の宅の犬が狂犬に成つて江戸川家畜病院へ連れて行つた時云々」とあるから，実際の経験にもとづいている。作中の「私」は学生時代から妻を迎えた現在まで，「小母さん」の許に同居して11年になる。作中の妻を岩田さく，「小母さん」をその母・伊藤ハルに擬すると11年の年数も事実と符合する。従って逆に「小母さん」には親も子もなく「私の外には手頼（たよ）る者がなかつた」というのは事実に依存しない設定である。妻のイメージや立場が曖昧なのが難点であるが，ヒロインというべき「小母さん」の挙止，家計まで任され，底抜けの信頼感をよせ合っている「私」との会話のやりとりなどには

沈静した情味が漂っている。「小母さん」はもともと猫好きだが，「私」が貰った犬にも愛情を持ちはじめる。その犬が原因不明の症候を起こし人に噛み付いたりするため，散々手古摺った挙句家畜病院に連れるが，間もなく死んで解剖により狂犬病とわかる。「小母さん」も噛みつかれ予防注射をすすめられるが，受けずじまいに通してしまう。ひとつには若い頃悪戯されて腕に青刺があるためらしいのである。―― 病院に犬を連れる緊迫した場面も淡々と書かれ，その中で「小母さん」の素朴で控え目な，しかし時には献身的な言動が快い印象を与える。彼女の寄るべない身の上がそうした好もしさの源なのである。草平が理想とする女性像の片鱗をうかがうことも出来，他者の運命の記述という新傾向の発現たるにとどまらず，味わいのある作品たり得ている。

大正２年前半期の作には，以上のほか，「追跡」（「新世紀」大２・７）[11] や「拳銃」（「読売新聞」大２・７・６）があり，随想には「尾濃の女性」（「新小説」大２・４）がある。

2　女弟子たちの入門

大正２年５月ごろ，森田たまと素木しづとがほぼ同時に草平のもとに入門したが，その前に，田村俊子の文壇登竜について草平が一役買ったことにふれておこう。

２年余を遡る明治43年１月，大阪朝日新聞が１万号発行記念事業として，文芸作品の懸賞募集を行なった。小説の部の選者は幸田露伴・夏目漱石・島村抱月だったが，最後の選に残った候補作が漱石の許に廻って来たとき，漱石は胃カイヨウと診断され長与病院に入院（６月18日）する直前であった。[12] ために漱石は草平に代選を委託したのである。この募集に田村俊子は「あきらめ」を投稿しており，最終候補に残っていた。草平は，

> 読んで見ると，何れもこれも似たり寄ったりで，これはと思うようなものはない。ただ『あきらめ』と題する一篇だけが，何うやら女の手らしい紫色のインキで書いてはあるが，女性らしい細やかな観察もあり官能の描写もあって，やや清新の気が流れている。取るならこれだと思った。

そして「思い通りになるような工作」をしようという魂胆で他の作と２～30点の差をつけ，[13] それが効を奏して一等に入選，俊子は賞金千円を獲得し危機的な生活の窮迫から救われた。このことは俊子の小説「木乃伊の口紅」にも出ており，草平は「代選」をした「新しい作家・蓑村文学士」の名で登場している。

草平が採点の「工作」をしたのには，異性に動かされ易い彼の性癖が連想されるが，女性競合者が他にあったことから推しても，先ず草平の文学的好尚をみるべきであろう。ちなみに俊子は前年田村松魚と結婚して間もない頃であった。「あきらめ」の単行出版に寄せた島村抱月の序文を，瀬戸内晴美「田村俊子」[14] に拠って引いて見よう。

> 此の作品には，第一に若い女の心のひらめきで，到底男の思ひ及ばない微妙なシェーヅが所々に捉らへてある。どうしても作者は女性だらうと思った。自分には是れが先づ面白かった。
>
> 次に一方単純な女学生式の生活に対して，複雑な下町式，または料理屋，女優，踊の師匠といった風の空気が，場所にも人間にも可なり鮮かに点出せられている。
>
> 此の二つの違った現代女性の世界を一つに綯ひまぜた所が，作者の強味である，ありふれた若い人々の作に比べて異彩だと思った。

草平が先に引いたような印象をもって当選に加担しようとしたのも不思議はない。「あきらめ」は44年１月から紙上に連載，上記の単行出版は７月であり，抱月と共に草平の書簡形式の序が載っている。やや長きに過ぎるが，草平の面目躍如としているので敢えて全文を掲げよう。単行書は未見なので，これも瀬戸内の著から援用する。

拝復

小説『あきらめ』の序文，あの時何の気もなく御引受けして，今では飛んだことを引受けたものだと後悔いたし居候折柄，御催促の御状に接して，頓にも御返事も成り兼ねたる始末に候。今更御詫びしてお断りするのも忌々しく，思ひ切って禿びたる筆を取上げ候。

かく筆は持ちたれど，何から書き始めてよいやら，余儀なく始めて『あきらめ』を読みたる折の感想でも申述ぶべく候。『あきらめ』を手に取りたる刹那，まづ紫色のインキにて書きたる肉細の女文字が眼に映り申候。段々読みもて行くに，女ならではと思はるゝやうな，美しき感能のにほひもあれば，こまやかな神経の反応も有りて作中の人物の名前はいかにも白粉臭けれど，皮肉な観察，穿ちたる心理解剖にも豊かに，而も其中から物に取縋らんとする様なる寂しさもありて，斯程の技倆を持ちたる作者が未聞の人の間に隠れ居たることの床しく，或事情からおのれが早くそれを知りたるをうれしく覚え候。其後さる折に，不図，これは誰か世に聞えたる女流作家の仮面を被りたるにあらずやと思ひ浮べて，あれかこれかと打案じながら，さる事なかれかしと念じたるも可笑しく候。

偖ていよいよ誰人の作かと云ふことも分りて，其作者は筆を執りてこそ聞えざれ，それよりは一層華々しい舞台に立って，長い袂を翳したこともある人よと聞いた時の心持は只御推察に任せ候。但し此処に一ツ云ひたいのは，私は偶然にも舞台に立った『あきらめ』の作者を見ぬ為でもあらうが，如何しても舞台の人としての此作者と，『あきらめ』の作者とを一つにすることが出来ないと云ふことに候。云ひ換ふれば，『あきらめ』の作者が嘗て舞台に立った人だとは如何しても信ぜられないのに候。これなぞも即てまた此作者の未来が長いしるしかと存候。

これでは御問に合ふまじきか。御気に召さずば破り棄てられてもよろしく候。以上。

五月三日　　森田草平

田村とし子様

以下も瀬戸内の「俊子」伝に助けをかりて補足すると，「舞台の人云々」は，俊子が作家よりも俳優として知られ，前年10月，東京座で「波」の主役を演じ喝采を博したことなどを指している。その後草平は，風邪のとし子を見舞ったり，草平訳「鴨」の女主人公のギイナ役に出演を依頼し一旦は引受けるなどの交友があった。またとし子に関する論評も前後3回執筆している。まず「新潮」大正2年3月号の「田村俊子論」特集に「新しき女としての女史」を書き，「作家としての俊子の才能を高く認めると同時に，教養ある男が譲歩して話をする必要のない知的な女性だと，文学以外の俊子の教養や知識を認めている」という。大正6年5月には同じく「新潮」の「田村俊子の印象」特集に「技巧と性質と並び到る」を書いたが，ここでは俊子が「技巧一点張」で「江戸っ児にしてはずいぶんねちねちした江戸っ児」という意味の評を加えた。そして「俊子との交渉は，年月と共に深まるといったものではなく，次第に，冷淡な書き方になっている」という。もっともそれには，草平との関係が冷却して来，平塚雷鳥主宰の「青鞜」に俊子が参加したことに関係があるかも知れない。以上の2篇は未見であるが，この間に，瀬戸内のふれていない「『炮烙の刑』について『青鞜』記者にあたふ」（「反響」大3・7）があり，俊子の「炬烙の刑」をめぐって雷鳥と論争をかわしたが，これについては改めてふれよう。

*

さて森田（村岡）たまと素木しづが草平に師事したのは大正2年5月である。山田昭夫編「素木しづ作品集」[15] 所収の同氏「素木しづ白描」は，しづの生涯については勿論のこと，森田たまに関しても草平やしづとの交渉に精しくふれており，以下これに負うところが多い。2人は共に北海道生まれで小学校と庁立札幌高女で同期，そして数日ちがいで相次いで草平に師事するという宿縁の友であり，文学的ライバルでもあった。

森田たまの上京は明治44年9月，しづは翌春であるが，山田氏の言を借りると，

森田たまの上京が一種の青春彷徨の文学的出郷であるのに対し，素木しづの場合は，小説家志望を口外せぬ右足の結核性関節炎療養のための転地であった。

森田たまについては知識不足で確信がないが，彼女の「文学に対する傾斜は最初の結婚生活に破れたこと（彼女の18才の時のことという）に端を発する」[16] らしく，18才といえば彼女の上京の年でもある。そしてその翌年自殺未遂を経験し，更に次の年にこれを小説の題材とした。この小説「片瀬まで」は，山田氏の記述を借用すると，

森田たまの少女小説ならぬ最初の作品『片瀬まで』は，すぐ活字になる幸運にめぐまれ，小宮豊隆責任編集の『新世紀』（大正２・９）に発表された。この作品は〈前年に片瀬まで死にに行って死ねずに帰ってきた自分の体験〉を一気に書き上げた告白小説であるが，（下略）

このように文学を志して上京したたまは，以前から投稿していた博文館の少女雑誌「少女世界」主筆沼田笠峰のもとに出入した。

一方，素木しづは女学校４年のときの打撲がもとで前記疾患に進展悪化し，明治45年３月末に一家をあげて上京，同年10月４日赤十字病院で右足を切断した。そして山田氏によると，彼女の「東京転住には，文学的立志の野心はあり得なかったと思われる。少なくとも，右足切断を不可避の運命だと観念してからは，そんな下心は跡形もなく消しとんでしまったにちがいない」しかし「さいわい手術は快調であった。入院生活三ヵ月，この間にしづは作家たるべく決意したのである」。ちなみに彼女も笠峰の雑法の投稿者であった。

そして２人共漱石に師事することを望んだが，漱石が女弟子をとらないのを知って，草平に弟子入りしたという。森田たま自身の回想では「子供の時から念じて居た創作家として立ちたいといふ希望を実現するために，思ひ切つて森田草平先生の門をたゝ」いた。[17] その頃彼女としづとの間には殆んど連絡がなく，しづの手術を笠峰から聞いて病院に見舞った程度であった。従ってたまはしづが同じ草平門を敲く手筈になっているとは知るはずもなく，また草平も２人の関係を知らなかった。たまが最初に草平を訪ねたとき，草平が何気なく北海道の足の悪い娘さんの来訪予定を語ったので奇縁に一驚した。数日後素木しづも草平を訪ねた。彼女は縁故を辿って安倍能成の紹介を得たのである。

森田たまは，文学を学ぶと同時に，草平の妻・さく（藤間勘次）から，漱石の姪の夏目千鶴子・水谷八重子やロシア人留学生・エリセーエフ[18] らと共に踊りを習った。そして前記「片瀬まで」によって素木しづよりも３ヶ月早く文壇にデビューした。松葉杖をひく素木しづは草平のもとで温く遇され，森田たまによると，

森田先生のお家ではおしづさんはまるで自家の娘のやうに可愛がられて居ました。優しい小母さんはおしづさんのたつた一つの草履を直す度に，涙を拭かないでは居られないといふ風でしたし，奥様は又おしづさんの帯を結び直したり，おしづさんが料理ごしらへが好きだといふので，わざわざ洋食の道具を買つてコロッケーを拵へたりなぞなさいました。[19]

「奥様」とあるのはさく，「小母さん」はその母である。もちろん後述の小説「下手人」からうかがわれるように，さくの方は同性間特有のこだわりを感じたことが絶無ではなかっただろう。しづは文学修業のほか英語を学び，帰宅の道をたまが付添う日も少なくなかった。第１作「松葉杖をつく女」（「新小説」大２・12）は草平の推ばんで発表され，草平はこれに，「小引」文を付した。

たま・しづ両女とも，漱石への入門が本来の望みだったとしても，草平師事には切実な意味を感じた。たまは前述の自殺未遂，しづは右足切断という，それぞれ生死にかかわる体験があり，師とする草平が煤煙事件で心中未遂の果てに文学によって社会的な復帰を遂げていることに，再生への道しるべを期待していたのである。ともかく師弟３人の間に体験上の相

似点をもっていた。草平の後述の小説「焼跡に立ちて」で同棲している男女が，たま及びその夫である久方男だとすれば，久方男が草平の「煤煙」を愛読したという因縁もあった。素木しづの方はそれどころではなく，草平によって，事実，再起のきっかけをつかんだようである。山田氏は，

> 森田草平は艶福家としても人後に落ちない風聞の持ち主であったが，素木しづにとっては，回生の発想を暗示してくれた精神の救い主であったといわねばならないようである。

といっている。特に第2作「三十三夜」（「新小説」大3・5）は，自分の生命を33才と限定することによって，かえって無限に生を充実しようと決意してゆく体験を描いたもので,まさしく「回生の発想」を成就したのである。大正3年にしづは20才だが，33才に自己の命数を定めたのは，厄年というばかりでなく，彼女の入門の年に恩師・草平が33才だったのにちなんだようである。しかし草平の煤煙事件の実質が，両女の再起に寄与したかどうかは疑わしい。

一方で「艶福家」・草平は，その後森田たまに言い寄ったこともあるらしく，また山田氏が森田たまから受けた示教によると，素木しづの草平宅初訪問以前に，九段の靖国神社境内で会っているという。

> しづが片脚の少女だと聞いた草平が，この少女こそ自分のために生まれてきた女にちがいないと考えて，九段に呼び出したのだそうである。しかし，いろいろ話をしてみると，しづが決して日陰でひっそりと暮すような女ではないことが判り，草平はがっかりした。

草平が自分でもとらえ難い異性感情をいだいたことは，後述の小説「下手人」（大3・3）からもうかがわれるが，それはともかく，草平の方がしづに教えられるところも大きかった。草平自身，大正7年しづの死去の折の「素木しづ子の追憶」[21] に，

> 私までがおしづさんを一生独身主義を通す女として，常処女であるべく生れた女として受け取ったのは，全く愚であった。

といい，「思い遣り」がなく「自分の趣味からばかり相手を眺め」る，「残忍なエゴイズム」にとらわれていたと告白している。そして，

> 彼女の眼に映る人生には，卒然として価値の顚倒が賁された。病気に罹ったのは不幸に相違ないが，病気であるお陰で本当に物を見得るやうに成った。

ここに，草平は未だかって知らない人間の姿を発見したのである。初訪問から5年後の文章に見える自省や凝視が，しづの師事当初からそのまま草平の内部にあったといえないことは，前述の異性感情から見ても明らかだが，多くの日を経ないうちに芽生えて来たであろう。そうした自省や凝視を必然的にする変貌を草平がとげていることもすでにのべた通りである。「煤煙」当時の草平ならば，遮二無二エゴイスティックな美化と行動に突進したかもしれないのである。森田たまに対しても，少なくとも数年後には，彼女が若い同世代の交わりの中で奔放に振舞うのを，一歩退いて見つめる姿勢をもつようになる。このことは「菌」（大5・5），「焼跡に立ちて」（同）の両作品をめぐって改めてふれるつもりである。

*

たま・しづ両女の入門とほゞ時を同じくして，いま1人の若い婦人との交渉がはじまったらしいことが，翌3年の小説「下手人」によってうかがわれる。多少の時期的誤差はともかく，「下手人」の語り口から推して無根の架空譚とは考えられない。そしていまひとつの推断を敢えてするなら，そこに登場する本所に住む女は安香ハナ（後のつね夫人）かと思われる。そこで，安香ハナとの出会いも上記両女とほぼ同時と推定して以下の論述を進めたい。

「下手人」の記述が安香ハナとの関係進展の実情を伝えているとすれば，彼女は2年来草平の文学に関心をいだき，上記の両女入門の頃はじめて手紙を送り訪問もした。半年を隔

てて大正２年秋から文通・訪問が繁くなり草平の心も彼女に向かいはじめた。安香ハナの生家は材木商「桐源」でその所在地は木場だっただろうということである[22]。津田英学塾を卒業した彼女は草平あての手紙を英文で認め，妻・さくの疑心に拍車をかけた（「下手人」）。折から草平は「自叙伝」の後，創作よりも翻訳に主力を注いでおり，彼女はその助手役として出入することになったと思われる。

ところで，ハナとは長く家庭を営む伴侶として間もなく結ばれるにもかかわらず，彼女との愛情を語る作品は絶無に近い。管見に入った限りでは，「下手人」がその発端を暗示するくらいのもので，「孤独を求めて」（大５・４）では，ハナとの関係に付随するエピソードは語っても，関係そのものには口を箝している。こうした事態は，草平の内部の既にのべた変化に関連している。というのは草平は従来，女性の境涯への独特な共感をもとにしてある種の恋愛情緒をかき立て行動へと向かうのが常であったが，ハナに対しては，そうした方式の当てはまらない，思いがけない形で，愛着をいだきはじめたと思われる。というよりも，草平が岡崎行を境として，主観的な行動の場から消極的な認識の場に移行しはじめ，自己の内面の営みに対しても，観念や情緒の鞭を加えることをやめて，先入見なしに動きのままに受け入れる態度にかわっており，従って，先行する観念や情緒を欠いた，ハナへの愛情は，未だ経験しない様相の下で出現せざるを得なかったのである。そして愛情そのものの質はともかく，例えばさくとの間に生ずる軋轢にしても，新旧の観念や情緒の対立・葛藤を伴わず，（「煤煙」において，隅江やお種への情緒に対して朋子への情緒に執着したのを想起したい），極めて世間的な次元で発生したにすぎない。こうしてハナへの愛情の，予期をこえた新奇さと，それがまき起こす波紋の世俗性に戸惑って，小説の中の題材に取り入れる手だてを失ったのだ。

「下手人」の中で，ハナと覚しい本所の女の家をひとりひそかに見に行く場面がある。このようなことは，かっての彼の恋愛行動には少なかっただろうし，少なくとも小説中で中心的な場面にはならなかった。つまり過去においては恋愛感情の在り様ははじめから半ば確立していたのだが，いまの彼は女の家を望見しながら，枠組を欠いて流動する感情の漂着する行方を測る必要があったのである。こうして恋愛感情は，作品の中で公言するに適しない，私生活の隠微な一画にとじこめられ，文学と生活との分化のきざしが見えはじめる。そして自身とは無縁の，他者の愛情の物語を架構し，またしばしば常識的な純愛讃美や虚飾の排撃に関心を向けはじめる。

*

大正２年後半の作品には，まず「起請文」（「文章世界」大２・８）がある。この作は，草平が明治32年の四高入学当時，最初の妻・つね（この作ではお巻，「煤煙」の隅江）が金沢まで後を追ってきたのが因で諭旨退学を命じられ，その後，半年ないし１年，名古屋の従兄のもとに身を寄せていた間を題材としている。作中では，従兄は鉄道員，その細君はおとわである。「私」は郷里に残してきたお巻を偲んで暮らしている。何くれと気を使ってくれるおとわは従兄には過ぎた女だが，何となく薄命を予感させる。お巻が監視の目を逃れて来訪，２人は起請文に血判を押して将来を誓い合い，連日名古屋近在を遊山して過すうちに，追手に連れ戻されてしまう。後にきけばおとわは四人の子を残して他界し，従兄と連れ添うときにも人知れぬ苦労を重ねた女だったとわかる。―― この作では，「私」とお巻とは人目を忍びながら一途に思い合っている男女として，従兄の恋女房・おとわは苦労の挙句早逝した薄幸の女として，素直に描かれ，従前の恋の把握の仕方とは趣きを異にしている。

「踊」（「新小説」大２・９）は，前年の「名取弟子」や「やまと」につづく芸ごと小説の側

面をもち，幸三が草平を，踊の師匠でその妻・お組がさくを，そして「小母さん」がさくの母をモデルにしているのは明らかである。小学生の女の子たちが踊の稽古に訪れて，お組の手ほどきを受けたり，その合間にねずみ将棋に興ずる光景，幸三もその花やいだ雰囲気にとけこんでいる様子は，いかにも平穏無事である。しかしやや唐突であるが，子供たちに小言をいうお組の声をきいて，幸三が，「他所の子をそんなに迄して教へて如何する？それで自分でも面白けりや可いけれど，自分迄気を腐らせて肝癪を起して居る。あんな馬鹿な奴はない！」とひとり苛立ち，また末尾に近く，お組に「何でせう，貴方は私を捨てる為に踊を習はせたのでせう。」といわせて，お組との違和の底流をのぞかせている。踊の稽古の平隠な情景と裏側に流れる夫婦の確執との対照を暗示し，こうした暗い影を伴わない前年の芸ごと小説とのちがいが見られるのである。前述の推定からすれば，安香ハナが実質的に草平のアシスタントをつとめるようになるのも間近い頃の作品と想像される。

「食客」(「ホトヽギス」大2・9)は，前月号予告で「伊勢参宮を書きたる小説なり。さながら写生文風の小説なり」というふれ込みがある。話題は草平少年時の事実に近いらしく，11才の「私」の見聞を回想風に綴っている。父の病死の後「私」の家に曲渕彦輔という27才の食客が同居することになった。母は彼を，「私」の異父兄ともいい，そうでないともいい，経歴は全く不明である。その彦さんが「私」を連れて伊勢詣りをすることになった。まず名古屋では，「叔父」と称する家や芸娼妓の口入屋に立ち寄り，そこで会ったのは，かねて彦さんが文通していた女らしい。その女をまじえて大須の蒲焼屋に上ったりした。翌日熱田から紀州新宮通いの船にのり，伊勢詣を終えるが，彦さんは賭博に手を出して無一文となり，山田の宿で3日間逗息し送金を待って帰郷する。―― 草平の母方の縁者に作中人物と同名の曲渕彦輔なる人物が居た事実があり，[23] 若し同一人物ならば実名小説でもある。ところでこの作品は短篇集「踊」(浜口書店，大3・1)には，題名のみ「伊勢詣」と改めて収録されている。「写生文」と銘打った前述の予告が作者の意図にもとづくとすれば，こうした題名の可換性に，紀行の写生と，人事の写生とのいずれを主とするかについて，作者の自覚の不分明さがうかがわれる。読後の印象からすれば，伊勢詣の紀行というよりも，得体の知れぬ彦輔の言動が中心であり，草平はここでも，認識の眼を培うために「写生」の手法を取り入れ，かつ奇異な人間像を，子供の眼を通して虚心に造型することを試みたのである。写生文の系統の作品には，この他「木曽の旅」(作品集「車の音」塚原書店，大3・5所収，初出誌未詳)や翌大正4年の「稲田詣で」もあげることができる。

さて大正2～3年には，「靴」「母と娘」「発作」など孤独の境涯を描いたものも目立つ。「靴」(「文章世界」大2・10)の主人公はアイルランド国籍・神戸生まれの寄席芸人・ローデアである。彼は他人への恐れから，すぐにやにや笑って媚態を示す習癖がある。東京の親方の家を出奔し，阪神地方を10日あまりも彷徨して，この日も中の島公園を当てもなくさ迷う。居合抜きの野師や，見知らぬ男女のいさかいが彼の眼に映る。浮浪者摘発の巡査に連行され，一夜を留置場で過ごし，職業への疑惑をはらすために署長の前で浪花節を語ったりするが，翌日釈放されると，靴を堤上にそろえて水中に身を投げる。この作で異国籍の寄席芸人を登場させた動機は明らかでないが，極度の孤独を描き出すための設定であることは疑いない。その上，彼の周囲に点出される他の人物たちも，人生の落伍者という印象が強い。ローデヤの孤独の背景や自殺の原因について説得力のある叙述を欠いているけれども，当時の草平の内面の反照を認めてもよいであろう。すでにのべたように，新しい方向の不確定なまま内面の転換に身を任せていた当時の彼は，生と芸術との拠り所を見失う危機にさらされ，おのずから文壇での立脚点が欠落して確信を失い，索漠たる思いにかられざるを得なかったことを

想像させる作品のひとつでもある。

「誰」（「帝国文学」大2・11）は，一人称形式であるが，作者の体験ではなく，見聞をもとに書いたものであろう。郷里を離れてS町の中学に入った「私」は叔父の家に止宿する。叔父の家には，従兄と家事を取りしきる女中がいる。冬の夜，叔父が縁側に倒れていた。従兄によると，叔父が女中の亀さんの部屋に通うようになり，それと知った彼が急に自室の電灯をつけて父を寒気の中に立往生させたためだという。やがて亀さんは身ごもって暇をもらい，東京に嫁入りした。後日来訪した亀さんは，叔父親子の板ばさみになっていたのだと意味ありげに語ってゆく。一方，叔父を知る同郷の友人たちは叔父の不行跡を話題にしている。しかし「私」は誰が張本人か疑わしいと思う。―― 男女間の不倫の関係を扱うことは草平にとって珍しくはないが，他人の情事を傍観し，自身の情緒的埋没を全く見せない，このような作風は，やはりこの時期に芽生えたのである。

同じ11月の談話筆記の文章「小説の中の女性」（「文章世界」）の冒頭に，「女性に対する吾々の考へは実際の女性に接して，それから来るものが多いか，それとも小説とか戯曲とかから来るものが多からうか」について，「小説の方から女性の概念を得た方が多いようである」といっているのは興味深い。[24]　女性遍歴の多い草平にしては意外の言というばかりではない。この前置きにつづけて，ドーデーの「サフオ」以下，彼が感銘をうけた作品中の女性像をあげているけれども，そのニュアンスは，かってそれらの作中人物をただちに実在の女性に重ね合わせ恋の行動の発条としたのとはちがって，いわば観察的な態度が滲透しており，「女性の概念」そのものの形成が関心の焦点になっている点が注意されるのである。

翌大正3年には，まず中篇に近いボリュームをもつ「母と娘」（「中央公論」大3・2）がある。25才の道代の父・吾一は，女中ときと密通しており，母お民との夫婦間の感情の亀裂が家庭の空気を暗うつなものにしている。そして道代は男を恐ろしい憎むべきものと教えこまれてきた。道代はしかし，父は悪人だが恐ろしくない，母は善人だが恐ろしいという実感がある。そこで母の憎しみの眼に同化して父を見ていたことに気づいたとき，疎外された父に共感を禁じ得ない。また孤独の余り何者をか求める心情が結局異性への渇望であるのがわかると，同時におのれの血肉を恐るべき男の典型である父から受けているのを思い合わせて愕然とする。このように，この作は暗い家庭環境の中で，親子という，不可離の関係が，相剋するふたつの糸で結ばれているという娘の感情を，かなり適確に描いている。改めてのべる筈であるが，後年の大作「輪廻」（大12）で，愛の妄執を子の世代でくり返すという主題を設定しようとした意図の先蹤を見ることもできる。単行出版（植竹書院，大3・10）に際しては，書名を「父と母と娘」と改めたが，これも，大同小異とはいえ，一層，親子関係の表裏を摘出する意図に沿うためであっただろう。とにかく草平にとっては意欲作にちがいないが，そこに見られる新生面がなお不安定であるのは争われない。度々のべた様に，草平は自己に執着して愛情を追求する姿勢を解体させながら，視野を拡散しはじめ，しかしこの作では消極的・受動的認識から一歩前進して，より客観的・立体的な人間の把握を果たしているが，自己執着の手軽な裏がえしとして，安易な仮構に足をすくわれたふしがある。例えば街頭の男たちの卑俗な言動に不快を感ずる道代の品格のよさは，草平の本来の感受性から唐突に飛びすさったものである。また，道代の対男性感情は，嫌悪から共感へと移行するのだが，従来草平が女性に想像・期待していたデボーションの姿態などから，どのような必然の糸を辿って生まれたイメージであるのかに，疑いが残る。草平は視野の変更・拡大と引きかえに，通俗的・常識的な道徳感覚や人間のタイプを受け入れたのである。通俗的な作風の前ぶれは，前述の戯曲「袈裟御前」に見られるが，「母と娘」あたりから，通俗小説への道がかなり鮮明に分出しはじめたので

ある。

「発作」（「文学世界」大3・2）でも孤独の苦悩を造型しようとしている。露路の入口から三軒目のしもうた屋に，弥吉・お縫の老夫婦と19才の娘・お末とが住んでいる。彼らは息子の啓造と同居していたのだが，嫁のお富の派手好みにリードされた若夫婦の生活態度に慊らず，別居して啓造の仕送りをうけている。ところがある夜，啓造が乱入して来て「貴様達は出て行けッ。此処は俺の家だい」と怒号する。間もなく彼は退散するが，お末は，家庭の状況が急変したことを感ずる。啓造の意識では，「潮のやうに重苦しい力がむくむくと身内に湧いて来」て，「此力，此力が使ひたいんだ。俺は此力の用ひ場がなくて困つて居るんだ」という衝動にかられたのである。「狂人の真似」をしたという自覚もあり，「お富，此苦しみが貴様には解らないかい。」という妻への不満が胸を衝く。一見安楽な生活を破壊したい衝迫が発作的行動を激発させたのである。―― この小説の背景には，かねて草平の傾倒するドストエフスキーの感化がある。後に改めてのべるが，彼のドストエフスキー評価は異常心理の描写に重点がおかれている。翌年の「カラマゾフ兄弟」訳[25]に付した「ドストイエフスキ小伝」には，

> 心理描写といふ中にも，特に異常な，人の知らないワンダフルな危機一髪の心理を描写することが得意である。

といっている。しかしこの小説はドストエフスキーの影響のみから成ったのではない。親たちにも与え，自らも妻と共に埋没している平隠な家庭から，別箇の生活に脱出しようとする胸奥の欲動で照らし出したとき，虚妄の平和のやり切れなさに苛出ったのである。そうした葛藤と共に，しかし一方で不安におびえるお末の存在に目を配る成心にうかがわれるように，結局暴走を抑止されている草平の心事の投影も見出すことができる。

「下手人」（「中央公論」大3・3）は前にふれた通り，安香ハナとの交際が本格化する前夜を思わせる作である。主人公の文士・太刀男は3年来翻訳で生活を送っている。彼はもはや女に「心を動かされさうもない」状態にあり，「小説の書けなく成つたのも――一つは女に対する憧憬を失つたからだ」った。おのずから「文壇から葬られた形に成つて居」る寂しさから，松葉杖をひく体の不自由な倭文子――明かに素木しづである――の相手をしている。彼女に対しても異性を意識するが，「恋人か，さもなければ赤の他人」と割り切らなければ不安を感ずる。そんな頃，半年前に手紙を寄越し自身でも数回訪ねてきた，今ひとりの女性から英文の手紙が届く。この女性のモデルが安香ハナと推定されるのである。太刀男と感情の疎隔を来たしている妻のお玉は心中穏かではない。太刀男は彼女と街上での面会を約すが，煤煙事件における雷鳥との逢瀬を思いおこして，「昔有ったことを二たび繰回すやうな」「可厭な気」がする。また「前の女によつて得られなかつた満足を後の女によつて補はうとし」，「過失を償ふに過失を以てする」遣り口が我ながら心苦しく，嫌悪を感ずる。このように自己の欲動に過去の反復を見出して嫌悪を感ずることは，過去の感情の様式が剝離しつつある証左であろう。彼には「煤煙の恋」を牽引したような恋の幻影は半ば消滅しており，従って前にふれた様に，それにかわる依拠を見失った自己の感情の定位を図るために，彼女の家の周囲を徘徊する。そして，「お玉の死を望んでゐるか」と自問する罪の意識に苛まれ，お玉が血を吐いて病臥するに及んで，彼女が死んでも自分の行動が原因ではないとわが胸にいいきかせるものの，題名には「下手人」の語を選んで自己を断罪しているのである。このことは，恋愛の遂行を裏づけてきた観念や情緒の支えが取り払われたために，妻への後めたさがふくれ上がり，所詮世間的な道義感の次元へ後ずさりしているのを示している。こうして，この小説が安香ハナとの出会いを語るという仮定に立つ限り，ハナとの愛情は，過去の恋愛

とは異質のものであり，過去のそれが草平の積極的な自己実現と主張に他ならなかったのに対して，今はむしろ人目に触れることを憚る弱点として意識された。従って「下手人」において出会い早々の動揺を記すところまでは対象に取り入れたけれども，以後ハナとの恋を語る作品が絶無に等しい結果になったといえるだろう。そして従前のユニークな恋愛観や行動から遠ざかることによって，自己の愛情の問題はむしろ制作の地平から引き下ろし，孤独の中に身をすくめようとする草平の姿勢が浮上してくるのである。

作品集「車の音」（塚原書店，大3・5）所収の「注連飾」「屍姦」「雪の夜」3篇は初出誌・年月ともに未詳である。それぞれ扱う事柄にちがいはあるが，自己主張よりも自己省察的な傾向が著しい。まず「注連飾」は，「私」が過去に因縁のある婦人を訪ねる。婦人は有夫の身であるが夫が所用で外出の間，婦人と共に過去の思い出を語り合ううちに，かって体験した情感の呼応が蘇ってくる。しかし夫の帰宅でそれは中断され，「私は矢張此の古い町を去ろう。一日も早く去る外はない」という思いに沈んでゆく。

「屍姦」は，前述の岡崎行の帰途，岐阜の郷里に立ち寄った事実をもとにしている様である。「彼」は「×××」を書いて後，7年振りに帰郷し，お重に会っておしほの動静をきく。恐らく「×××」は「十字街」であり，「彼」・お重・おしほは，それぞれ，草平・「煤煙」のお倉・同じく隅江であろう。「彼」はおしほに対する感情が「病理的」であり，狂人が「女と接触したゞけでは何の快味をも感ぜず，必ず相手の女を殺して，其死屍に姦しなければ止まぬ」のに一脈通ずるのに思い到って，

> 屍姦！
>
> 彼は闇の中で飛上つた。そして，蒲団の上に坐つたまゝ，凝乎と考へて居た。あゝ，俺はおしほを屍姦して居る。

と叫ぶのである。

「雪の夜」では，佐々木が書肆と出版上の談判をするについて，山田はその介添として同行した。佐々木は生田長江，山田は草平を連想させる。談判は不調に終り佐々木は窮状に悩んでいるらしい。偶々山田は別の双書の編集料50円を懐中にしており，温存すべきか佐々木に用立てすべきかに迷い，結局両者の中間に置くのが上策と思い当たって酒亭に上り散財する。ところが，ふと気づくと懐中にはまだ10円札がある。どうやら無意識のうちにその2枚を別にしておいたらしい。山田は「俺は此金子を盗んで置いたのだ。泥棒したのも同じ事だ！」と心の中で叫ぶ。そしてうどん屋にはいって車夫や居合わせた他の客に振舞ってしまう。この作品は独特の味わいがあり，草平の人柄のよき一面がにじみ出ている。

「大地震の日まで」（「太陽」大3・4）は淡々とした筆致で幼時の思い出を綴ったもので，抒情味が溢れている。この種の作は，「離合」（明42・8）「舟は流れる」（大8・10）など，ほのぼのとした感傷を誘うのに成功しているものが多い。回想の中心はお澄後家の一人息子で，語り手の「俺」より1つ年上の円ちゃんである。幼ない交わりの中で，臆病な「俺」は何度も円ちゃんを損な役廻りに立たせ，やがて年と共に疎遠になっていた。そんなときに襲いかかった大地震で円ちゃんは家屋の下敷になって死ぬ。それを知った「俺」は，円ちゃんとの間柄が「何となく仲違ひの様に成つたのが子供心にも気に懸つ」て，「円ちゃんが死んだのは俺が悪い」と思いこむのである。こうした後めたさは幸運に恵まれたものが味わう一般的な心情であり，ここではそれに加えて幼い年頃の神秘感情が働いていたにすぎないのであって，制作当時の草平に濃厚な罪の意識とは無縁のものにちがいない。しかし幼い自責の心の追想に誘われる基盤が当時の意識にひそんでいたのである。中村星湖はこの作について，

> いかにも物慣れた話し振りで，あれだけの人物や，事件や，心理やを話して退けた手腕に惚れ惚れし

た。何等の誇張をも矛盾をも感じさせず，しかも良心の働きの鋭敏な子供心をよくもあゝ捕へて来たと思ふ。

と感服している。[26] そしてこの作品とともに，上述の2作が，「屍姦」では対女性の心理において，「雪の夜」では金銭上の利己心について，過剰とも思われる自責の感情を吐露していることに改めて着目しておきたい。

3　『反響』の発刊

草平が生田長江と共同主宰で雑誌「反響」を発刊したのは大正3年4月であるが，いつ頃から計画をねり始めたかは審かではない。しかし明治末～大正初の間に同人誌続出の季節を迎え，「白樺」（明43），「新思潮」（第2次－明43，第3次－大2），「青鞜」（明44）などが発刊される情況下で，草平としても漱石師事以前から文学的交友を結んで来た長江と共に，自由に発言できる場所を欲したことは想像に難くない。前述の小説「雪の夜」でも，彼ららしい人物がそんな希望を話題にしている。長江は「青鞜」発刊には大きな役割を果たしたが，大正2年4月ころから次第に遠ざかり，[27] そのことも雑誌発刊への意欲を懐く一因になったかもしれない。

こうして誕生した「反響」は，評論にかなりウエイトをおいたものになり，またその点から当然のことながら，草平よりも評論家・長江の方が積極的だったようである。創刊号には発刊の辞の類はなく，巻末の「消息」欄で発刊前後の経緯や意図の一端を知り得るのみだが，草平が発刊披露会の記事やエピソードだけを記すに対して，長江は次のようにいっている。

◎私共が雑誌を出したのは，人真似をしよう為でない。なるべく他の雑誌とちがつたところのあるものを拵へるつもりだ。

◎（前略）私共は批評に主きを置くと云ふ事からして，つむじを曲げ始めるつもりである。

更に「党派」性の強化を予期し，「政治論」も実行したいという意欲も示している。草平の参画は，彼自身の願望に加えて，前にふれた岡崎の住職・安藤現慶（枯山）や，植竹書院主であり現慶と共に日月社を興した植竹喜四郎の熱意に動かされた気味がある。林原耕三氏の回想では「最初は評論を主とする意図らしかったが，やがて一般の文芸誌になった」[28] というのであるが，評論の比重は結局減退していない。

草平が編集に参加したのは5号（大3・9）までで，6号（大3・10）で経営から手を引いた旨が7号（大3・12）の長江の後記に見えている。また次の8号（大4・1）では草平がその経緯を次のように釈明している。

自分が「反響」の経営を辞したので，何か生田君と小生との間に主義や意見の相違があつて止めたやうに噂される向きも有るやうだが，それは間違ひだ。（中略）事実は斯うです。最初安藤枯山君が金子を出して，雑誌を遣つて見たいといふ話が有つた時自分は別段雑誌をやるだけの意志もない所から，早速生田君の所へ持ち込んだ。所が，安藤君と小生とは元から懇意で有つた行きがゝりから，両者の繋がりとして当分小生が経営――会計役を負担することに成つた。（中略）元来自分はそんなに雑誌を出すといふことに興味がない。生田君は割合興味が有る。そこで都合好く話が纏つて云はゞ予定の進行を取つた次第で有る。

しかし草平の文学態度も両三年来行動から認識へと中心点が移行しつつあったから，評論の比重の大きい雑誌の発刊に参画する下地は彼の内部に胚胎していたことも否めない。「反響」発刊は，彼の文学行路の中で無視できぬ里程標たるを失わない。ついでながら，草平が遠ざ

かって後は主に長江と枯山が編集に当たり，９号（大４・２）の次は，巻号の序次を改めて２巻３号（大４・３）～２巻５号（大４・５）がつゞき，３ヶ月を隔てて復刊１巻１号（大４・９）が出た。以上は近代文学館で披見したものだが，結局復刊１号が終刊になった様である。ちなみに昭和７年１月から昭和13年８月までの間，72号を数えた第２次「反響」は，同誌名ながら無関係であろう。

創刊号の草平の「消息」によると，発刊に先立つ３月14日の夜，神田橋外の三河屋に「初号に書いて貰へさうな方々」を招いて披露晩餐会を催した。出席者は草平・長江のほか次の人々で，同号に記念写真も載っている。

津田青楓　徳田秋江　中村古峡　植竹喜四郎　小宮豊隆　岩野泡鳴　安倍能成　鈴木三重吉　岡田耕三　堺枯川　万造寺斉　伊藤証信　沼波瓊音　和辻哲郎　阿部次郎

しかしこれらの人々は当夜の参会者というにすぎず，そのまま実質的中核ではない。これとは別に，林原耕三氏が「創刊打合せの会に佐藤春夫や江口渙と共に列坐した」[29]というのは発刊以前の準備会の一だったのであろう。参会者や執筆者が，漱石門下のほか，それぞれどんな因縁によるのか未詳の人が多いが，堺枯川などは招待を受けたのを意外としたらしい。[30]枯川は草平が日本中学在学中保証人を頼まれたが，以後親交を結んだ形跡は乏しい。しかし草平に枯川を迎え入れる資質があったことは確かであろう。

草平が名実共に編集に預った５号までについて見ると，執筆回数の多いのは，長江・草平を筆頭に，安藤現慶（枯山）・生田春月・岩野泡鳴・沼波瓊音らがつづき，素木しづ・生田花世・万造寺斉がこれを追っている。一方漱石門下では，阿倍次郎・和辻哲郎・安倍能成・小宮豊隆・野上臼川が各１回執筆しているにすぎない。このように見ると，披露会出席者の比率にくらべて，漱石山脈とのつながりはその一支峰ともなし難い程度であり，といって独自の統一理念も確立するに至らなかったといえよう。強いてあげるなら安藤現慶・伊藤証信らの宗教家が加わることで，評論の領域が宗教に及んでいるのが異色といえる。折から，植竹書院内に設立した日月社が「宗教叢書」46篇を企画し，「反響」大正３年10月号に予告を掲載したが（完結したか否かは不明）その分担者は５号までの「反響」執筆者50余名と重複するものが多い。なお新進作家では素木しづが２～４号に３篇の小説を掲げているのが目立ち，村岡（森田）たまは初号の１篇だけである。

創刊号（大３・４）に草平は，「中島清氏訳『サアニン』を読んで」・「増富平蔵氏訳『イフイゲニエ』」の翻訳短評２篇と，「漱石山房座談(一)」とを掲げた。後者は連載するつもりだったであろうが，後続していない。第２号は１ヶ月飛んで６月の発行である。この号に彼が書いた「下画」は官憲の忌諱にふれて発売禁止になったが，先ず題名の意味について一言しておこう。「下画」という同名の小説は，４号（大３・８）にも載っており，この事情も含めて，草平の意図は５号（大３・９）の評論「岡崎より」に明らかである。彼はいう，

> 元来，下画といふのはデスサン若しくはスタデイと云ふ程の意味である。創作によつて生活して居る自分が，『反響』のやうな性質の雑誌に毎号書くといふことは，少なからぬ苦痛である。で，自分の見たこと，想ひついたことを忘れぬためにスケツチして置くといふ位の意味で小説らしいものを載せやうと思ひ附いた。そしてかくの如くして出来上るものゝ総体に名附けたのが，下画といふ題である。

これによると，藤村が詩から散文への移行の努力のなかで試みた「スタディ」に近似し，前述の「食客」その他に見られる写生文の導入にもつながっている。いずれも，行動とないまぜに紛乱する自我意識を打出す態度を離れ，ないしはその結果創作上の停滞を来したために，客観的なイメージをありのままに定着させる視座を求めて，自己に課した修練であった。しかもいわゆる写生文の方法には，とかく自然の風物に傾斜する不足があり，自己の生活と内面との

より広い対象を念頭において，「下画」の名の下に「スタディ」を積み重ねようとしたのである。上引文の中で「第一の下画ではヴイオレンスを書いたから，第二の下画では泥棒を書くといふ様に——」という言い廻しに，その間の消息が推測できる。もっとも第二の「下画」は長江らの批判[31]をうけて，写生文風に書くべきだったと反省し，改作案を示しているが（前引「岡崎より」），その当否はともかく，写生文とは異なる目標をもつ試行だったのを物語る。2ヶ月後の「二百十日前」（「文章世界」大3・10）が，日記風の身辺雑録の体を用いているのも，写生文や下画の方法の採用に共通の要求にもとづくであろう。

第一の「下画」は，従兄のもとに止宿している三吉が，妻のお船と自分とを残して家中出払った間にお船を犯そうとする場面を描き，きわどい部分はドイツ語を使っているが，当時としては大担な性描写があり発禁は必然であった。三吉はまず「誰も居ないのが悪いのだ」と自己を正当化する。犯罪を犯すには「共犯者」が欲しい，「其連累者が，人間に求められぬ時，彼はそれを周囲の事情に迄持つて行く」のである。そして頭痛のために寝床にあるお船に近づいてゆく。自分を信用している従兄への裏切りの自責感，はげしい動悸，夫の従兄よりもお船に憚る自分自身への怒り——それらと格闘した果てに，ようやくお船に手をかけ，抵抗を誘発して自分の獣性をかき立てようとする。最後に女が哀願をくり返しながら執拗に拒んだとき，三吉はしたたかに女の感触と硬直とを味わう。しかし漸く目ざめてくる残忍な征服欲とはうらはらに性の衝動は力弱く退いてしまう。

ここで肉体と心理との両面を貫く，かなり露骨な性描写を敢えてしたのは，一口にいうと性の呪縛から身を引き離すためではなかったであろうか。草平は心理的陰翳をからみ合わせながら両性交感の中に揺蕩する女の姿態に引き寄せられるのが常であった。そうした誘引の触媒となるものは，かえって類型的な性感情であり，つまり彼特有の性心理の介入が肉体的繋縛の導入路となっていたのである。そして年来ようやくそうした過去の束縛を離脱しかけたときに，おのが身につきまとっていた性感情や心性を駆逐するために，感情の起伏をねばり強く追跡し，また至極即物的に性的行為を追尾して，自己の性のイメージを客観化し剝離しようとした。それがこの作品の意図だったと思われる。

林原耕三氏によると，森田たまが「前の夫」と結婚していた時，「『反響』に森田さんが書いた『下絵』のモデルにしたのは，名誉毀損だと息込んで夫婦ですごみ込ん」だことがあるらしい。[32] ここでいう「下絵」が内容からいって第一の「下画」を指すのは明らかである。しかしいま知り得る限りで強いて求めれば，作中の舞台は四高退学直後世話になった名古屋の従兄宅（既述の小説「起請文」に登場）を想起させるが，そもそも特定のモデルを比定するのにふさわしい作品ではない。とにかく自身の性の心理とイメージを検証する試みだったであろうから，「スタディ」の通常の概念をこえて，彼の内面の苦闘の秘められた作といってよい。

第二の「下画」（「反響」4，大3・8）の主人公は活版職工の常吉であるが，草平みずから自己の投影であることを明らかにしている。[33] 常吉はもらった賃金をそっくりふところにして一夜の遊興に散財，翌日は公園・小料理屋・浜町河岸の水泳場・明治座を当てもなくさ迷い歩く。自分を「金儲けの器械」扱いにする妻子や親のいる家に帰る気がしないのである。水泳場で不健康な自身の裸身を眺め，家族のために肉を殺ぎ「ちびりちびり自殺する」のも同然であるのを感ずる。しかし空財布をもって帰宅するバツの悪さを思うと，逆に家族のために盗みの誘惑にかられたりもする。ふと店頭の人だかりの中に，買物の銭が不足で泣き出した親子がいる。それを見た彼は，今の世の最大の苦痛は飢餓や空腹でなく，「奢りが充されない」ことにあると考え，盗みを決意するが，具体的手段には思い及んでいないのであった。——常吉のイメージは前述の「靴」のローデアに同類の既出があるが，草平の孤独と彷徨の心情

の縮図に他ならない。またそうした縮図を作り出すところに意図があったであろう。ということは，彷徨の心情にはまりこみ埋没した従来の多くの作風から脱皮し，体験のそれに流されない制作独自のペースをつかみとろうとしたにちがいないからである。その意味では性の心情の粘着から身をふりほどこうとした第一の「下画」と共通のモチーフをもっている。

この2篇の「下画」は少なからぬ不評を買った。第一の方は掲載号の発禁の因となり，「岡崎より」における草平の言によっても，「諸方からいろいろ非難を受けた」。しかし彼は「あの作が悪ければ，それは彼の作の出来上りが悪いので，あれを書かうとした企てに於ては毫も非議さるべき所以を知らない」という自信の程を見せている。第二の「下画」に対して長江が批判をよせたことは前にふれたが，具体的には，末尾の場面で，今の世の苦痛は「奢りが充たされないからで有る」という考え方を取り上げ，「飢餓や空腹」の苦痛に対する無理解を衝いたのである。草平はそうした苦痛は自明の前提と弁明し，むしろ自身の真意を通じさせ得ない「自己を表現する技量」の乏しさを知ってたじろいだ。そして写生文風の改作案を示したのだが，これば半ば思い過ごしであり，ささやかな「奢り」さえ打ち砕かれる庶民の嘆きに共感した草平の感受性を評価してよいはずである。これと関連して長江が同時に，

> 私は草平君が一人称の作品にすべきを，わざとらしく三人称に飜案してしまふのを見る毎に，いつも名状することの出来ない不満を感ずるのだが，二度目の「下画」の如き特にその感を深くした。

という，往年「十字街」に対するのと同趣の言を与えたが，半ば適評であり半ば的はずれだった。というのは，作品としての安定を期するには長江評は妥当であるが，草平のねらいを汲み取っていないからである。

一体草平は，「初恋」の女との再会のための岡崎行以後，既に縷説したような方向転換を辿りつつあり，ために創作の目途を失い，前出の小説「下手人」にも，

> 次の小説（＊暗に「煤煙」につづく「自叙伝」を指す）は悲しい運命に遭逢した。世の人は彼（＊太刀男＝草平）に欺かれでもした様に憤って，彼から背き世人の嗤笑を招くに過ぎなかつた。焦躁れば焦躁る程，結果は好くなかつた。到頭，自分でも小説を書けなく成つた。
>
> 其後三箇年といふもの，太刀男はずつと飜訳で生活して来た。

という状態に陥っていた。しかしそうはいっても，大正2年から3年春までは，飜訳のかたわらかなりの多作ぶりを見せていたが，二つの「下画」で苦しい模索を試みた後，創作の意欲と技倆とに一層の涸渇を覚えたようであり，「反響」4号の「編集の後」で吐露した飜訳専念の意向はさらに痛切なものとなった。

> 私は爾後一年ばかり創作の筆を絶つて，飜訳に隠れる（で飯を喰ふ意味）覚悟をした。つくづく創作の要求なしに筆を取るのが堪えられなく成ったからで有る。

果たして，「下画」2篇以後1年間の小説は，前述の「二百十日前」（「文学世界」大3・10）と「一人ぼち」（大4・7）のみであり，更にその後の1年間は，写生文風の「稲田詣で」（大4・7）をはさんで，ドストエフスキー飜案の3篇がつづき，端的に自己を語る作品は急減してゆく。なおこの前後数年の間に「十字街」（春陽堂，大元・12）をはじめ，作品の単行，作品集の刊行は活溌で，「女の一生」（春陽堂，大2・5），「踊」（浜口書店，大3・1），「車の音」（塚原書店，大3・5），「父と母と娘」（植竹書院，大3・10，「母と娘」を改題したもの），「踊」（同），「未練」（東京堂，大3・12）があげられる。伊藤孝子氏編の年譜では，ほかに大正4年中に数種の改版刊行もあるようである。

「一人ぼち」（「新公論」大4・3）では，表題に見る様にやはり孤独をテーマにしている。小関正治は勤め先の岩見沢・大林区署が廃止になり，産婆を営む妻・お増に頼って暮らした。やがて札幌に単身就職してひとり暮らしをはじめ，お増の留守宅には太物屋の番頭・清さん

が入りびたった。だが正治は一向平気で帰宅の折など清さんと晩酌をかわしたりする。お増と娘のお幸に清さんを加えた3人暮らしにはさまざまの噂が立つ。間もなくお増はお幸と清さんの祝言をとりきめ強行した。披露宴の席で正治はいきなり清さんの両耳をつかんで引き倒すが，結局お増の前に平謝まりに謝まって札幌へ帰ってゆく。――ここでは無気力な男の長い忍従の年月と拙劣で無力な不満の暴発の姿が描かれ，ぶざまな孤独の在り様が示されている。これもまた草平の境涯の反映であり，小関正治は2つの点で草平の自画像に近いものと思われる。つまり当時の草平が安香ハナとの関係の密接化に伴って，第1にさまざまなトラブルからのがれたいために孤独を要求したにちがいないこと（ただし作中の小関は自発的に別居したのではない），第2にはトラブルに処するぎこちない対応が推測されることが符合するのである。それはともかく，手法としては，自己を反映させながら他者の生活を架構する手際をかなり身につけた点も見逃せないであろう。

ところで，「反響」誌上の評論の中で，平塚雷鳥（「青鞜」発行とともに単に「らいてう」を筆名としたが，[34] 便宜「雷鳥」を用いることとする）との応酬を取り上げねばならぬ。雷鳥とは煤煙事件における因縁浅からぬ間柄であり，以後雷鳥が陰に陽に草平を批評することも多く，互に疎隔を感ずるようになっていた。「反響」発行には，先行諸雑誌のうちとりわけ雷鳥主宰の「青鞜」が意識されたようであり，山田昭夫氏が前掲書で，素木しづが「『青鞜』に一定の距離をおいていた理由の一半は，『反響』の創刊にあった」という様に，女弟子の去就にまで微妙に波及していた。

ところで事の起こりは，田村俊子が大正3年4月「中央公論」に発表した「炮烙の刑」に対して，草平が読売紙上の時評で言及し，つづいて雷鳥が批評を加えたが，その中に草平文を誹議する箇所があったのにはじまる。以後両者の間に翌4年1月まで論戦が交わされたのである。これに関係のある事項を列記すると次の通りになる。

(a)	田村俊子	大3・4	中央公論	炮烙の刊
(b)	草　平	大3・4・21～22	読売新聞	四月の小説
(c)	らいてう	大3・6	青　鞜	田村俊子の『炮烙の刑』の龍子に就いて
(d)	草　平	大3・7	反　響	『炮烙の刑』について青鞜記者にあたふ
(e)	らいてう	大3・8	青　鞜	森田草平氏に『「炮烙の刑について青鞜記者にあたふ」を読んで』
(f)	らいてう	大3・11	日月社	『現代と婦人の生活』
(g)	草　平	大4・1	反　響	『現代と婦人の生活』中，自分に関する一節について

田村俊子の「炮烙の刑」は，夫・慶次をもった龍子が年若い広三を愛する愛情の葛藤を描いたもので，瀬戸内晴美によると，俊子が帝大文科の学生Iを愛し夫の松魚との間に生じたトラブルにもとづいている。[36] ところで最初に草平の痛にさわったのは，雷鳥文(c)の中で，草平の読売紙上の短評(b)を引き合いに出した次の箇所である。

> 慶次と共に女に対する理解を缺いてゐる森田草平氏は女が自分の行為を罪悪ではないと男の前に言ひ張つた一事をもつて直にモラルセンスの缺乏と取られたものらしい。（中略）或は草平氏は単純な意味で龍子が他の男を愛したといふことを直に堕落と見做してゐられるのだらうか。Nさんは草平氏の評を見て，モラルセンスを缺いた男が他人の作品をモラルセンスを缺く故をもつて非難したのはおかしいと言つて笑はれたけれど，私はそれとは別の意味で，随分理解のない，皮相な外面的な見方だと思つた。

この中で「女への無理解」，「モラルセンスの缺乏」（草平が(b)で用いた「倫理的意識」のいいかえで，紛糾の種の一つとなった）といった非難と用語の選択，Nさんの冷笑の援用（雷鳥は(e)で「Nさん」

が野上弥生子であることを明らかにした）などが主たる争点となり，以後の応酬も，感情論的な対立や論点のすれちがいも見受けられ，字句に拘泥したきらいもあるので，そのデテールは割愛するが，総じて雷鳥の論理の方が芸が細かく，草平は圧倒されがちであった。

しかし勝敗はともかく，草平・雷鳥両者の発想の隔差を知る好箇の材料にちがいない。まず雷鳥はみずからいうように，「作品を作品として評する」のでなく「『龍子』といふ一女性」を論ずる一般的な観点にみずからを限定した結果ではあるが，「新婦人」のあるべき態度を物差にして龍子を裁断したきらいがある。一体雷鳥によると，

> 一人の男丈では到底自分の恋愛的要求の全部を満すことが不可能だといふ場合は（これは不幸なことには違ひないが）二人の男を同時に愛することが外面的にはともあれ内面的道徳の立場から見れば罪悪だとは決して言へない。

ところが，龍子が自分の行動を罪悪ではないとする２つの理由――「あの男を愛するのも慶次を愛するのもそれは自分の意志だから」および「自分はどんな時でも，誰れよりも慶次を愛してゐる」という理由――には「自分の行為に対する明らかな自覚」が認められない，従って「龍子は自分に対しても，男に対しても自分の行為を立派にジャスティファイし得る丈の正当な理由」があるにもかかわらず，それを「発見しえない」ところに重大な過誤があった，というのである(c)。これに対して草平は，

> かゝる行為を是認するためには，其女の恋愛的要求が真であり，純であり止むに止まれぬ（其外に自己の内生活を全うする道がないと云ふ意味で）もので有ることを必要とするので有る。

という観点から，

> 正直に言へば，自分は龍子が自己の不聡明のために正当な理由が有りながらそれを発見し得ないのだなぞとは丸で考へ及ばなかつた。自分は彼女の缺点を矢張倫理的な方面に有ると考へて居た。女史はそれを単に知力の問題だとして居られる。

とのべ，雷鳥が知的自覚を要求するに対して草平がいわば情的真実を尊重する，愛情観の対立を指摘したこと自体は，少なくとも正鵠を得ている。もともと草平は「堕落すればする程，一層倫理的意識が鋭く成らねばならぬ」(b)というように，知的抑制をこえて不倫の行為に陥没する場合でも，同時に倫理的意識の覚醒に胸を痛めるという様な，人間の矛盾にみちた姿を先ず思い描いており，すべての行為――世間的には不倫の行為をも含むにせよ――をジャスティファイし得る知的自覚を最上とする発想とは，基本的な懸隔があった。と同時に，

> 女史の龍子に対するジャスチフィケエションは要求で有つて，龍子の実際ではない。

というのは，単なる事実確認以上に，雷鳥が龍子に対して作中人物としてのトータルなイメージを欠き，思想的裁断に偏向したのを不満としたからであった(d)。

次に，雷鳥が３年８月の反駁文(e)で予告した続稿は遂に現われなかったが，その間に出版した『現代と婦人の生活』(f)中の草平評にこたえたのが，草平の最後の文章である(g)。雷鳥の著書(f)は未見なので草平文に拠るほかないが，「女史は又自分（＊草平）が徳田秋江氏や鈴木三重吉氏と共に無教育な無智な女を好きだと言つたと主張」したらしい。これに対して草平は「覚えのない言ひがかり」としながらも，「只無教育な女が好きだと言ったことは或は有るかも知れない」，だが同時に「誰も世の中に無智なたわけの女が好きな者は有るまい。これは論外である」といい，ここでも知的自覚をもつ「新しい女」を唱道した雷鳥との根本的な懸隔を浮彫りにしている。そして草平が無教育な女を好くのは次の理由によるという。

> 自分が無教育な女を好くといふ意味は，教育ある女は其教育のために眼を眩まされて，本当に自己といふものを見ることが出来ない，本当に自己を知つて徹底した生活を営むものは無教育な女に多いと信ずるからである。

そして「新しい女の代名詞の如く言はれて居る『人形の家』のノラ」や「罰と罪」のソニヤを「自己を知」った無教育の女の例として挙げ，また「カラマゾフ兄弟」中のカテリイナとグルシェンカとは「愁じ教育あるが為に最後まで自己を見る眼の開かなかつた女と，左様でない女」のそれぞれの代表であり，ズーデルマンの「罪」では「所謂教育のあるために不徹底を極めた女と，生れながらに徹底した自然の女との対照」を描いている，という。これは前述の通り，知的自覚を要求する雷鳥に対して，いわば情的真実を期待する草平の立場を一層具体的に布衍するものであった。

4　西洋文学への傾倒と飜訳

草平ははやく西洋文学とくに大陸文学に興味をいだいたが，馬場孤蝶の知遇と刺戟を得て一層関心を深め，また明治35年ドーデーの「サッフオ」に強い感銘を受けるに及んで，生活意識に密着する文学享受の態度を培い，創作の上でも影響をうけるにいたった。そして彼に最も広くかつ深い影響源を提供したのはドストエフスキーであって，これも漱石との出会い以前に遡ることができ，師事の後には，漱石に閲読をすすめた程であった。[37]

彼が海外文学を愛読するばかりでなく，飜訳に本腰を入れはじめたのは，イブセン「鴨」（「新小説」大元・11～12）からであるが，以後，大正年間の訳書で今までに確認し得たもの，および確実と思われるものは，次の通りである（○印は単行本）。

イブセン「鴨」	大元・11～12	新小説
○同	大2・2	新潮社
○ダヌンチオ「快楽児」	大3・12	博文館
○「カラマゾフ兄弟」	大4・4	日月社
○「悪霊」	大4・7	国民文庫刊行会
ボッカシオ「心臓の羹」－十日物語の一節－	大4・9	新公論
○「ウイルヘルム・マイステル」	大14・6	国民文庫刊行会
○「アンナ・カレニナ」	大15・	生方書店

また雑誌広告などから，

(?)「死の勝利」	大元・	
○しゃんくたら姫（宗教著書第8編）	大3・	日月社
○シェンキェウキッチ（軍事小説）「祖国の為に」	大3・	博文館
(?)ドストエフスキー「憑かれた人々」	大3・	(24頁の注記参照)
○ファウスト	大4・	日月社
死せる魂	大6・	

の訳出が推定され，なお上記「カラマゾフ」は，はじめ，大正3年末までに，3分冊（日月社・宗教叢書第5～7編）で続刊されたらしい。なお，伊藤孝子氏があげているのは，明治期も含めて，上記と2・3重複するが，次の諸篇である[38]（ただし年時等に誤植があるようである。）

十字軍の騎士	明37・	時事新報
しゃんくたら姫	〃・9	時代思潮
鴨	大元・11	新小説
○サッフオ	大3・8	青年学報社

評釈霊関問題と死の恐怖	大2・12	第三帝国
○祖国のために	〃・11	日月社
黄金に盛つた男の心臓	〃4・4	新日本
死せる魂	〃6・1	国民文庫刊行会
○ファースト	〃7・12	文武堂
○大戦と女	〃8・12	弘道館
千一夜物語	〃14・9	国民文庫刊行会
○ドストエフスキー（倉田潮共著）	〃15・3	東方出版社

草平の飜訳の仕事が，一面で創作上の行詰まりからの転身であることは，彼が随所に告白するところで，小説「下手人」や「反響」4号誌上にもそれが窺われることは前述した。だが他の一面で，西洋文学の受容に積極的な意味を見出していたことも事実である。飜訳の最初の成果である「鴨」の進行中に書いたと思われる随想・「近き未来に於ける我邦の文学」（「誌売新聞」大元・9・8）で，それを知ることができる。この中で草平は，トルストイ・ドストエフスキー・フロベール・モーパッサンを有する西洋の自然主義が自然主義の本流で，日本のそれは「期待からはずれた」ものとし，代って擡頭した「享楽主義」・「江戸趣味」も「皮相な反動」にすぎず，結局邦人の作は邦人の作ということ以外，意味が乏しいと断じた。そして一縷の希望は「飜訳の時代」を経て，西洋に競争し得る作品が生まれることであり，「飜訳は邦人の眼を世界的にし，世界的の文学の樹立する所以」だとのべている。この主張はやがて，彼自身の「邦人」的な過去を克服しようとする意向とも重なり合い，1章でも述べた様な，大正期初頭からの彼の文学的転換を傍証する言とも受けとれるものである。

次に，彼の訳業のすべてが内的必然に発するわけではないが，しばしば自己の生活と文学的要求を反映あるいは実現する媒介として取り組んだ。イブセンの「鴨」がまず然りで，特に老いたる元中尉エークダルに自分の姿を見出した。エークダルは紳商ヴルレエに陥れられ，過去の栄光を失った落魄の身であり，往時の雄壮な鴨猟の夢を，今は物置に飼育する鴨に追い求め，かえってそこで満足するにいたる。訳了間もない岡崎行を扱った前述の「岡崎日記」では，草平の分身・要に「何だか自分も彼の老人に似て居る――矢張鴨を飼って居る」という感慨をいだかせている。草平は身内に感ずる脱落と自己卑小化の実感を「鴨」飜訳を通して味わったのである。

「鴨」の次に力を用いたのは，ダヌンチオ「快楽児」であろう。これは草平にとって最初の本格的訳著と推定されるものである。ダヌンチオの「死の勝利」は，いうまでもなく，煤煙事件とその作品化に重要な影響を与えた。しかし「快楽児」に関しては，それほど内的つながりを感じた気配はない。訳書の「小引」にも，

> 或時代には全然ダヌンチオに没頭して，自分が創作の上にも少なからざる影響を受けた。此点に於いて，自分は此作者と浅からぬ因縁がないではない。

としながら，アーサア・シモンズの英訳書序文のダヌンチオ論の照会にスペースの大半を割き，草平独自のダヌンチオ観は殆んど開陳するところがない。結局ダヌンチオとの結びつきについて，

> シモンズの所謂彼（＊ダヌンチオ）は故郷『アブルツチの百姓と同じやうに，直接自然を了解した』といふ，其百姓に似て居た位のもので有らう。

という，至極外面的な相似点を苦しまぎれに引出した程度に止まっている。ひとつには，草平の転身が，ダヌンチオ傾倒を去ったためであらう。

さて，草平の大陸文学受容は，ドストエフスキーについて特に注目しなければならない。

彼のドストエフスキー傾倒が早くから行なわれたことは前にも述べたが，日本のドストエフスキー影響史上でも，先駆的な，またユニークな役割を果たした。まず「煤煙」がドストエフスキーに負うところが大きいこと，また依拠の構造については，清水孝純氏の詳説があるが，[39] 草平自身も，通説的推測に反して，「死の勝利」よりもドストエフスキーの影響の方が大きいことを証言している。[40] そして清水氏によると「草平がドストエフスキーの体験を実験しようとしたのが塩原事件であり，そのレポートが煤煙であった」。こうしてかっての草平におけるドストエフスキー受容は，その世界を行動の中で実験するのを主体としていた。こうした姿勢は「罪と罰」のソニヤのデボーションの情趣を現実の女性が体現することを求めて恋愛試行を重ね若干の作品に定着するという実績にもあらわれ，そうした行動との密着を随想の中で自認もしているのである。[41]

ところが，草平はほぼ大正期初頭以降，上来のべてきたように行動を先行させる文学的態度を脱却し，自己分解と，認識の視点の新たな模索をはじめ，しかしドストエフスキー傾倒は依然つづけられるのであって，こうした新しい姿勢のもとでのドストエフスキー受容のピークが大正４年（草平35才）前後に訪れる。それはあたかも文壇全体においてもドストエフスキー熱が高まった時期ではあった。翻訳には上掲「カラマゾフ兄弟」「悪霊」などを試み，更に以下に摘記するような，訳書・評論・飜案小説があった。

大３・２　メレジュコフスキー「人及芸術家としてのトルストイ並びにドストエフスキイ」（安倍能成と共訳，玄英社）
大４・１・30　「ドストエフスキイの一面」（「読売新聞」）
大４・５　小説「妻の帰宅」（「新公論」）――「悪鬼」から飜案
大４・６　「新しい女の二典型」（カラマゾフ論）（「文章世界」）
大４・７・18　「悪霊の序」（「読売新聞」）
大４・９　小説「霙」（「新小説」）――「大都会の暗い片隅より」から飜案
大４・10　小説「産婦」（「文章世界」）――「憑かれた人々」から飜案
（植村進氏の御教示によれば，「憑かれたる人々」は「悪霊」，「大都会の暗に片隅より」は「地下室の記録」と同じ作品であり，「悪鬼」が「悪霊」と同一物であることは草平「悪霊の序」に見える。

大正３年のメレジュコフスキーの共訳に付した草平の序文では，吉田精一氏のいわれるように「この書を全くトルストイの評伝としてのべ，ドストエフスキーのドの字も出していない」そして「もちろん（＊原書の）内容にその気味があるとはいえ，やはり当時のトルストイ熱の影響でもあろうか」と推測し得るのである。[42] とすれば，草平が大正３年のトルストイへの関心をはさんで，翌４年のドストエフスキー傾倒への復帰という推移は，周囲の思潮に多分に左右されたことになるが，彼とトルストイとの関係については，後にのべるように，再び翌５年に独自の一時的接近を見せることになる。

次にドストエフスキーの飜案小説を大正４年に多作していることも注目される。これらはドストエフスキー的世界への嗜好に基づくのはいうまでもないが，矛盾やひずみや不手際によって歪曲された現実の諸相を，客観的にとらえ造型しようとする試みでもあった。つまり同じ傾倒の継続でありながら，心情的にその中にひたり切る以前の姿勢ではなく，ドストエフスキーの視座を身につけ人間とその生活圏とを形どる修練をしたというちがいが，ここにもある。創作上の壁にぶつかっていたことからいうと，飜案小説でお茶をにごした一面があるのを免れないけれども，同時に創作への新たな活路を切り拓く瀬踏みでもあった。このことが部分的には，「罪と罰」のソニヤへの魅惑から「カラマゾフ兄弟」のミーチャへの共感

の方へ，あるいはソニヤに対しても，恋愛情趣の刺戟源から女性の典型を捉える範疇として受け入れることへの移行にもあらわれている。ミーチャについては，大正4年9月の小説「霙」はもともと飜案ながら，作中の「私」を，原作と出自をことにするミーチャにたとえ，大正4年5月の小説「焼跡に立ちて」でも，副人物ではあるが恒夫をミーチャに似た性格とし，更に後年の代表作「輪廻」（大12）でミーチャをもじって草平の分身・迪也（みちや）の名を得た——清水氏によると「未成年」のドルゴルーキーに酷似しているという[43]——ことに関心の深さが知られるが，いずれもミーチャの人間像が自己認識の媒介となっているのである。

このように受容の態度は変わったけれども，彼が魅せられたドストエフスキー的世界の第一の中心が「異常さ」にあることは特徴的である。「ドストイエフスキの一面」にいう。

> ドストイエフスキの作物が日常茶飯の尋常事の間に人生の機微を捕へて描くと云ふよりは，寧ろ普通の人間生活では一生遭遇することの出来ないやうな，人生のクライマツクスに於ける人間の心理を道破して，其処に溢るゝ如き人間味を出さうと努めた傾向の有るのは有名な事実で有る。

また抄訳「カラマゾフ兄弟」に附した「ドストイエフスキイ小伝」にも，

> ドストイエフスキイは好んで何う言ふ人間を主人公にしたかと言ふと，極端な人間を捉へ来つて，これを主人公として取扱つてゐる。大抵は馬鹿か狂人，狂気になり掛つてゐる者等，アブノーマルな無能力者で，ツルゲーネフ，トルストイの普通の人間を主人公とするに対して，一種のコントラストを成すものである。

といっている。草平のこうした観点からの推奨に対して，漱石は「そんな非常な事件や強烈な刺戟乃至は激越せる感情を取扱はなければ，人生に触れないやうに云ふのは間違いだ。平凡な日常の間にも深刻な人生はある」として斥けたのである。もっともそれが明治42年頃の漱石の見解として限定すべきは，清水氏のいうとおりであろう。[44]一方後述の「タアニング・ポイントに立つている自分」（大5・8）では，ドストエフスキーに共鳴するいまひとつの要因として，「センチメンタリズム，殊に女性を取扱ふ上のセンチメンタリズム」をあげている。ところが，いま一度清水氏に従えば，「大正初年から四，五年にかけてのトルストイ移入に続いたドストエフスキー移入の，どちらかといえば半ば感傷的で半ば異常趣味残酷趣味に偏している解釈」[45]に傾いた趨勢があり，とすれば草平の傾倒の以上の二側面とも，一般的動向に制約された結果にすぎないともいえる。

しかし，草平がセンチメンタリズムをあげるとき，彼独自の志向に渕源することも認めねばならない。一体彼のドストエフスキー受容の態度が行動の場から認識の場への移行を背景として変質したことは前述の通りであるが，それは彼特有の，いわば体験的認識への移行にはちがいなかった。「異常さ」についても，自己の内部感覚を抜きにした共感ではなく，ドストエフスキーのそれが体験に裏づけられているという理解が，親近感をいや増す原因であった。「ドストイエフスキイの一面」で，メレジュコフスキーが設定した，

> 作者は果して単に他人に対する観察や客観的経験からばかり是等（＊異常なこと）の凡てを知り得たもので有らうか。

という疑問に対して，

> 斯ういふ事だけは争はれない。ドストイエフスキーは左様いふ事も想像し得る人で有つたと。心の中で経験し得る人で有つたと。恐らくはそれに多大の興味を持つて内部生活の幾分がそれに支配されて居た人で有ると。

という解答を示しているのもその証左である。草平の共感は，自身の生活の日常的秩序が危胎に頻しているという実感にもとづいていた。「煤煙」の行動と作品化におけるような，そうした感覚の先導によって自己を牽引する態度のかわりにいわば思いがけなく湧出した安香

ハナへの愛着をも含めて，否応なしに体験を強いられている内面の亀裂を，ドストエフスキー的な世界と重ね合わせてかみしめたのである。だがそうはいっても草平はそうした新しい体験の質を作品化する基軸を見失っているために，上引文につづけて，「併し斯う言った所で，別に何等の結論にも達しないのである」という一行を一文の結語とせざるを得なかったのである。

飜案小説3篇のうち，便宜上はじめに「霙」（大4・9）に触れておこう。野蛮人のように孤独な生活を送る30才の会社員「私」が，友人たち・愛人・雇いの老婆とのどの関係においても，自尊心や虚栄を守ろうとすればする程，悔恨と羞恥と屈辱感にわれとわが身の切り苛まれる，際限のない苦悩が描かれている。ドストエフスキーの「大都会の暗い片隅より」にもとづき「小学校の生徒がお手本を紙の下に敷いて其上からなぞって書いたやうな」と自ら注記している。

「妻の帰宅」（大4・5）はドストエフスキー「悪鬼」に，「産婦」（大4・10）は同じく「憑かれたる人々」にもとづくことを，自注しているが，前者の話題はそのまま後者の前半部にほぼ一致し，重複使用されているにひとしい。前者は，製靴工場の職工・榎本三吉が会社の方針を不満として下宿で無為の日々を過すところへ，3年以上別居中の妻・お町が病苦に堪えかねて訪ねてくる。三吉は喜びと恐れを感じながら発作に苦しむ女のために何かと世話を焼く。やがて女の発作は他の男の胤を宿して出産の間近いためとわかるが，質草の時計を手にして産婆を呼びに出かけてゆく。後者も男女の名が相島佐吉と菊子にかわるだけで前半の話題は前作に等しい。但しここでは佐吉は社会主義の信奉者であるが，主義そのものでなく主義者への不信から人生の目標を失った人間である。そして後半で産婆が駈けつけた後にも筆が及び，やがて父親の知れぬ男児を分娩した菊子と相擁して喜ぶ佐吉は，産婆の失笑を買うが，3人の家庭の新生活に希望を感ずる。その矢先，社会主義者検束をはじめた警察に連行され，間もなく釈放されて帰宅したものの，菊子はショックを受けて死んでいるのだった。——両篇とも不幸の因を作った当の女に対して，憎しみの代りに不相応な好意を示す男の呪われた純朴さを，後者は更に幸福の芽をつみとってゆく権力の無慈悲さを，あるいはその誘因である主義抱懐のみじめさを描いている。草平はこれらに自己の辿っている境涯の模写を見ていたはずである。

「産婦」で，飜案ながら，半ば肯定的に社会主義にふれているが，その片鱗は3ヶ月後の小説「稲田詣で」（「新公論」大4・7）にはじめて現われているので，ここで言及しておこう。この作は2人連れで常陸国稲田の郷に親鸞の旧蹟・西念寺を訪れる写生文風の作で，文学的にはそれ以上のものではない。但しおのずから親鸞を論ずる宗教談を含み，またここでも「カラマゾフ兄弟」の一場面を思い出したりする。そして問題の一節は次の通りである。

> 私どもは最早神原の井や御杖杉のやうな奇蹟を必要としなく成つた。が，別の意味に於て，又別の奇蹟を望んで居るのである。猶太の民がキリストの出現を待つて居たやうに，其の実現を待つて居るのであるそれは何だ？何だ？一言だけは言はれ得る。曰くソシアリズム！

もっともこれだけ明確な社会主義待望の発言は，時期的に孤立先行したもので，直ちに彼の思想の志向として定着したわけではない。爾後，選択許容の対象として社会主義を肯定する程度の「贅沢を追ふ心」（大7・1）や「政治的文学について」（昭8・2）を経て，次第に確かな社会主義接近の底流を形作って行ったと考えられる。

さて「新しい女の二典型」（大4・6）は，雷鳥との論争に関連して既にふれたが，「青鞜」に拠る閨秀思想家たちのキャッチ・フレーズ「新しい女」を逆手にとり，ドストエフスキー作中の女性像を掲げて，自説を主張したものである。そして，「カラマゾフ兄弟」中のカテ

（8・1），「作家と境遇」（8・4），「続夏目漱石」（18・11）のいずれも然りで，ドストエフスキーへの関心の通路はここに絞られてゆく観がある。

一方のトルストイには，やはり「闇の力」に興味を示し，「贅沢を追ふ心」（「婦人公論」大7・1）や「トルストイの片影」でも言及しているが，結局トルストイには親しみ難く，接近は一時的に終った感が深い。例えば上記「片影」では，

> 要するに，トルストイは明哲保身の術を心得た天才者である。私が偉大だとは思つても，どうしても好きになれない所以はそこにある。

といっている。

しかし一時的にもせよ，トルストイに接近したとき，草平は従前にはない新生面をのぞかせたのである。一つは，「誤れるもの，罪あるものの味方でありたい」という意欲を鮮明にもったことであり，他の一つは「社会の自然の缺陥・暴力」に着眼したことである。岡崎行以来の彼の変貌を，消極的・受動的な認識の場への移行という風にとらえて来たが，その延長線上で当然突き当たるはずの新しい鉱脈にふれたというべき事態がそこにある。エゴ追究の行動への集注から拡散的な認識へと転進したとき，未確定のまま置き去りになっていた認識の立脚地として，「誤れるもの，罪あるものの味方」を志向することで，積極的な認識の方法をつかみかけたのである。一方，社会の「缺陥・暴力」は，認識の対象に属するものであるが，「缺陥・暴力」の犠牲者である「誤れるもの，罪あるもの」の側に身を寄せる以上，必然的に視界の中に浮かび上がる対象であり，従ってこの主客の両面はうらはらの関係にある。ここにいたって，直接の見聞の圏内で耳目にふれる対象を認識するにとどまらず，眼前の事象の背景にひそむ「缺陥・暴力」にも，視線を及ぼす可能性をもつようになったのである。だがそれも，ドストエフスキー受容の態度にもうかがわれるように，体験的連鎖をこえるところまでは飛躍しない。社会の「缺陥・暴力」も「社会の自然の缺陥・暴力」の域にとどまる。社会主義の散発的肯定に心情の上でつながるところはあっても，社会体制的認識にまで拡大せず，いわば体験的認識の埒内に限られる。そしてそのことと相関する帰結として，このような変化あるいはその徴候を，彼自身明確に自覚したのではなかった。

5　通俗小説と評論活動

大正4年にピークを迎えたドストエフスキー傾倒と，その間にはさまれたトルストイへの一時的接近に促されて，草平の文学活動は，大正5年（草平36才）以後に若干の新展開を見せた。その第一は通俗小説執筆であり，第二には草平としては最も活潑な評論活動を試みたことである。しかしそれより先，草平の一身上にも重大な事態が起りつつあった。

それは他でもない，安香ハナとの関係が離れ難いものとなり，5年初め男児をもうけるにいたったのである。草平としては，森田つねとの間に生まれた亮一につづく，次男の出生であり，郷里の清流にちなんで長良と名づけた。草平は，ハナとの関係および長良の養育について，むろん安香家との間で意見の調整をはからねばならなかったが，より以上に頭を悩ましたのは，既に冷却し切っていた上に，新しい事態によって一層深刻化したと推定されるさく夫人とのトラブルの解決であり，それには当然経済問題もからんだ。草平は問題処理のために，しばしば漱石膝下の同門・小宮豊隆に助言を求め，また，遅くとも長良の出産の迫った頃までに，茨城県布川町で酒屋を営む攻玉社時代の同窓・海老原氏に乞うて，出産にそなえるハナと草平自身の止宿先の周旋を依頼した。そしてハナは千葉県大森町六軒もしくは木

リイナが，なまじ教育があるために自己を見る眼の開かなかった女，グルシェンカがそうでない女の典型であるという対比を説いたことは前章でのべた。なお，草平の「カラマゾフ兄弟」訳に対しては，佐藤春夫が「『カラマゾフ兄弟』――草平氏に対する感謝の為に」（「読売新聞」大4・6・15～16）と題する一文を草して讃辞を呈している。

ところが草平は，大正5年8月の文章で，ドストエフスキーからトルストイへと方向転換する気配を見せた。それは同月「新潮」の特集「どんな作品を書かうと思ふ乎」の執筆6作家の1人として寄稿した「タアニング・ポイントに立つて居る自分」である。彼はそこで，ドストエフスキーにひかれた理由として「主人公の異常な境地」や「センチメンタリズム」を再びあげるとともに，これに対してトルストイは「成程偉いとは思ひながら，余りにオウフルで，何うも近づき難い気がした」と，前置きしたのち，

> 近頃に成つて私は一種のターニング・ポイントに立つて居るやうな気がする。それはだんだん私の心がドストエフスキーを離れてトルストイに向ふやうに思はれることである。

と告白する。彼によるとドストエフスキーを好んだのは，自身の天才を信じ得たからであるが，今は，

> 畢竟，私自身が平凡に成つたとも言へれば，夫丈成熟したとも言はれやう。私の眼にはだんだんトルストイが偉大に見える様に成つた。

しかしその理由について充分な説明を欠き，「煤煙」の作者としての彼自身も含めて，日本人が成功し易い「気分や感覚を主とした小説」を引き合いに出した箇所も，肯定・否定いずれの立場によるのか不明瞭である。ただ末尾で，一層深くトルストイを研究して「飽く迄小説の奇道を行かない，所謂正面から人生に打突かつて行く作がして見たい」と結んでいる点から，トルストイを「気分や感覚」を克服する手がかりとして考えたとも受けとれる。

このトルストイ称讃は，芸術座の「闇の力」公演からうけた強い感銘にもとづくもののようで，以後トルストイを語るとき殆んど例外なくこの戯曲を引用している。上記随想と同じ月には「冤罪と『闇の力』」（「新小説」大5・8）もあり，この方がむしろターニング・ポイントの在り様を明瞭に語ってくれる。この文章ではまず，法廷の誤判頻出の傾向は冤罪の顕在化という意味でかえって危険が少ないこと，また「人間は誤ちを犯し易い」という見方から，誤判に対する世間の非難には与し難いという。そして「自分自身誤れるものとして，飽く迄誤れるもの，罪あるものゝ味方で有りたい」という念願を吐露している。ついで有島武郎の「陳子へ」に言及して，人の過誤の誘因を「社会の自然の缺陥・暴力」に求めて次の如くいっているのは注目すべきであろう。

> 主人公と陳子との別離が周囲の者の奸策に出たとするよりも，現代の社会の自然の缺陥，自然の暴力に余儀なくされたとする方が，吾々に対する圧迫も一層強く，一層打克ち難い感じがしないだらうか。

最後に「闇の力」を取り上げた箇所では，「自分は此劇を見ながら，つくづくトルストイと云ふ人は悪い事をして来た人だと云ふ感に迫られた」といい，先にいう「社会の自然の缺陥・暴力」の加担者ないしは行使者としての，トルストイの秘められた体験を直覚したのである。と同時に草平は，そこに自分の体験を重ね合わせることによって，みずからも「缺陥・暴力」を捉え得る可能性を仄見たのである。

しかし前述のように「輪廻」の主人公に，「カラマゾフ」のミーチャにあやかって迪也と命名した事実に俟つまでもなく，翌大正6年以降の随想・評論では再び折りにふれてドストエフスキーを語り，特に「白痴」中の死刑目撃の体験を引用することが多い。「推移の跡・体験の意義・小説でない小説を求む」（大6・8）をはじめ，昭和期の「トルストイの片影」

下町（ともに現在印西町に編入）に仮寓し，草平は現地出張の折の本拠を布川町徳満寺に得たと推定される。布川町は茨城県，木下・大森はともに千葉県で，県域をことにするが，利根川をはさんで左右の対岸に向かい合っている。なお布川は，小説「母」（「新潮」明42・11）の舞台に使ったことがある。そして若干の紆余曲折ののち，3月には，ハナと長良との母子が同地で新しい生活を営むこととなったらしい。以上，推定をまじえて草平の私生活に深入りしたことは穏当を欠くおそれもあるが，要はこうした数々の配慮の仕方に，草平の生き方をうかがう手がかりを求めるために他ならない。

そうした意味で当時の草平を知る一助となる小説に「孤独を求めて」（「文芸雑誌」大5・4）がある。草平が海老原氏を訪ねて仮寓先として徳満寺を紹介された顚末に材を得たもので，それぞれ，「私」・長（海老原氏の名・長を姓とした）の名で登場し，寺号は実名どおり，徳満寺である。「私」は「三十を過ぎた一家の主人」でありながら「家の者に無断で旅に出る」ことを，「「異常と云ふよりも，何だか見すぼらしい。余りに人聞きの好くない話である」と自認している。長は地方の有力者で，周旋を頼まれた寺のことにお構いなく連日「私」を款待する。「私」は「孤独を求めて此処へ来ながら，此処でも到頭孤独は得れない」と嘆く。ようやく寺の離座敷に独居する時間を得て解放感を味わった。

> 家に在っては，家庭と云ふものに縛られて，私は思想の自由すらない。手紙すら，思ふ儘には書くことを許されない。が，明日からは此の大きな景色を独り占めにして，少くとも当分の間は自由な，広濶な生活が送られるのだ。
>
> 『希には家を離れ，友達を離れて，一人で生きることが何んなに人間には必要であらう！』

「私」は眼下に横わる利根の長江を見はるかしながら，こうつぶやく。しかし長は依然歓迎ぜめを止めようとはしない。しかも寺の生活を1日味わっただけで，妻が連れ戻しに訪れ，更にその翌朝には東京宅の隣家の火事を知らせる電報が来て，上野行の車中の人となる。――借室の周旋と孤独の時間とを一刻も早く得たい「私」と，それには全く無頓着な饗応のみを楽しむらしい応揚な長との対照がユーモラスであり，広漠とした利根の流域を舞台に，独特の味わいが漂っている。ところで，草平の布川行は安香ハナの出産に伴う諸事弁済のためだったにも拘らず，この作ではそれに一言もふれていない。そして表面に浮かび上っているのは，当面の所用からさえ飛びすさろうとする孤独への願望である。このことを，先に推測的にのべた，事態解決に飜弄される草平の姿と考え合わせると，「煤煙」の恋の当事者と同一人とは思われない草平の変貌が，別の角度から明らかになる。

草平がさく夫人と共にほぼ5年に及んで家庭を営み，彼自らいうように「平凡になつたとも言へれば，夫丈成熟した」（前出・「タアニング・ポイントに立って居る自分」）中年期の恋であり，しかも単なる情緒的よろめき以上の事態に逢着している以上，当然の変化といわねばならぬであろう。しかしこの場合，変化の質と落差の大きさに留意しなければならない。たびたびくり返したように，過去における，観念と情緒に先導された恋が，そこに自我の充足を目指す作品化へとつながる主情的な一連の行動を離れ，いわばそうした図式を無視して彼を捉えた新しい恋は，もはや彼の文学の糧ではなくなったところに，重要なちがいがある。生活と芸術との過剰な錯綜をくぐりぬけて，認識の場に一歩あるいは半歩を踏み出したのと入れ替りに，新しい文学的志向の質は，自身の恋に対してにわかに疎遠となり無力となったのである。その結果世間的な生活者の次元で身辺の始末をするところに誘いこまれ，同時に生活者としての煩わしさからの解放を願って，「孤独を求め」る欲動にも駆られたのである。そこには無意識裡に新しい芸術の世界を遠望する草平の横顔をのぞかせているが，それが実質的な結実を約束するような条件は，彼の内部には乏しかった。

ここでついでながら，「孤独を求めて」につづいて発表した２・３の作にふれておこう。「焼跡に立ちて」（『太陽）大５・５）と「菌」（「新小説」大５・５）とが「姉妹篇」として書かれたことは，「菌」の後書に作者が注記している。両作とも，ほぼ同時の執筆で，脱稿は前者の方がわずかに早いと推定される。そこでまず「焼跡に立ちて」を取り上げよう。冒頭に，「私は私自身に見せるために儚なく終つた私の恋の顚末を小説に綴るのだ」とあり，その恋の相手の玉村てる子は，森田たまを思わせるが，「私」に実在のモデルがあるか否かは明確ではない。ただ一面で自己を客観する草平の分身としての機能を受け持っているとはいえるだろう。だがもっと端的に草平自身を彷彿させる人物は，作家の葉山である。しかし話題の中心は，てる子とその夫・恒夫や妹のおしげ，及び彼女の家に出入する「私」・相馬・萱野・河原らの学生とＯ・Ｂたちが，現代のそれを思わせるフリーな交際を展開するところにあり，葉山はむしろ，若い男女のグループの圏外にある。両作とも作者の位置からずれた観点を「私」に設定して，自己を客観視する作風が著しく，前者はそれに加えて，葉山を青年たちの外におくことで一層その傾向を深くしている。

てる子は夫・恒夫を「兄さん」と呼んでいるが，これは，林原耕三氏が森田たま書簡中に「兄」とある人物に注記して「夫，久方男，従兄養嗣で慶応の学生。兄さんと呼びならはせり」としている[46]のに一致する。また，てる子宅が若い世代たちのクラブ化している状態は，森田たまの次の回想[47]に符合するものであろう。

> ○神楽坂時代。とひそかに名づけている一時期が私の過去にある。……
>
> 二十一の夏から二十二の夏まで，ちやうどまる一年間，私は神楽坂の「鳥金」といふ料理屋の横丁をはいつた，露地の奥に住んでゐた。湘南の病院から死に損なひの恥さらしな身体をまつすぐその家へ運んだので，あたりまへなら山の奥へでもかくれてしまふ筈のところを，私はかへつて巷の喧騒の中へ身を置きたいと考へたのであつた。
>
> ○その上私が毎日ちがふ男の人と歩いてゐる。一たいどの人がほんたうの旦那なのだらうと，近所の取沙汰がやかましかつたさうだけれど，知らぬが仏で，私は誰と歩かうと平気の平左であつた。どの人もみんなお友だちなのに，友だちと一しよに歩くのがなぜいけないのかと傲然としてゐたのである。学生さんが多いやうですが，どんな方方ですかと，夜中にやつて来たお巡りさんが，賑やかな座敷をのぞきこむやうにして，お客さまの身許まで調べようとした時も，私は昂然と胸を張つて答へたものであつた。さうです，みんな学生です。いまにえらくなる人ばかりです。

つまり，「焼跡に立ちて」の主たる舞台は，森田たまの所謂「神楽坂時代」に結びつく。その「神楽坂時代」の男女のグループのひとりである「私」は，女王のように君臨するてる子に愛をいだき，また接近し得たという自信をもつが，同時に，

> 私は其（＊てる子の）言葉の下に葉山氏の出世作××の女主人公を想ひ起した。そして此女の言ふことの何れだけが真実で，何れだけが詩の飜訳だらうと，疑ひの眼に，凝乎と真顔を見返して遣つた。

という不信の念を注ぐこともある。「××の女主人公」とはむろん「煤煙」の朋子（＊雷鳥）であり，別のところで，「私は女の空想に操られて，自分で自分を飜弄して居たやうな悔ひも有つた」と自省する「私」には，雷鳥に対する愛の模索を顧みる草平の自画像を見出すことができる。

作中で「神楽坂時代」が終る頃に相当する箇所で，葉山が行方をくらまし，間もなく千葉・稲毛海岸の海気館に滞在しているのがわかり，「私」やてる子の一行が訪ねてゆく場面がある。それから程なく，てる子が茅ヶ崎・南湖院に入院，服毒自殺をはかり，最後に北海道の郷里へ帰ってゆく。これらはいずれも事実で，葉山が泊った海気館は実名の旅館であり，草平が同館から小宮豊隆に送った稲毛海岸の絵ハガキには，「十五日から不図思ひ立って此方へ仕事を持つて来た」とある。消印の年月を判読し難いが，一先ず大正３年３月15日と推

定しておきたい。森田たまの入院や服毒にもとづく部分は，創作である以上当然ながら，実際の序次とは喰いちがうらしい上に，入院の時期と期間，「神楽坂時代」との先後関係など，現実の経過そのものも，未詳の点が多い。[48] 最後の北海道への帰郷は，山田昭夫氏の指摘する大正４年８月４日の時事新報「文芸消息」欄[49]に見える，

> 村岡たま女史，茅ヶ崎南湖院に入院中の同氏は病気殆んど全快に赴いたが事情があつて作家たることを断念し此程札幌へ帰つた。

という記事で裏付けられ，山田氏は，たまが「ついに素木しづとの文学的ライバルの座から退いた」としている。それはともかく，「私」が，てる子一行の帰郷を上野駅頭に見送る，次の場面を一篇の末尾としている。

> 私は汽車の出て行く後を永い間目送して居た。気が附くと，ひろいプラットフォームの上に人影もない。何だか自分の家の焼けた火事場の跡にでも立つて居るやうな気がした。——

この感慨には恐らく草平の心境が託されており，題目の由来がここにあるのも無論である。しかし先にのべた様に，「煤煙」の恋の渦中にあった草平と事変わって，「私」はてる子との交わりの中に既に「飜弄される悔ひ」を自覚した位であるから，それ程傷ついた人間として描かれてはいない。冒頭にいうとおり「儚なく終つた恋」をいとおしむ程度だっただろう。従ってこの作には，「私」が最後の心境に到達する必然を充分に納得させてくれないうらみがある。しかし草平は，てる子や「私」たちの間に燃え上った感情の応酬に，おのが「煤煙」の恋の再現を見てとり，自身はその圏外に立ちつつ，そうした激情への疎隔感を早々と作中の「私」にまで与えてしまったのである。そのことによって，単に若干の仮構を介して自己の体験を傍観するにとどまらず，別箇の世界に自己を移し入れた上で，遠去かった過去の体験を，境を異にする世界として造形し得ているところに，この作の新生面がある。つまり例えば，岡崎行を題材とした「初恋の女」系の諸作に見た体験傍観の作風から一歩を進めたものになっている。

「菌」は更に虚構の性格が強い。「焼跡に立ちて」の「姉妹篇」と銘打った作者の後書に惑わされて，両者の登場人物やプロット上の相似を単純に予想するのは誤りであろう。まず語り手「私」の登場は前作と同様だが，今度は女であり，前作の葉山ほどではないが何がしか草平に近い葉村さんを慕う心がある。しかし葉村はむしろお久美さんと４・５年来深い関係にある。そのお久美さんも，「姉妹篇」という先入観に左右されると，森田たまをモデルとする前作のてる子の再登場を思わせるが，デフォルメの度合ははるかに著しい。結末に，

> 私は不図暗いじめじめした菌のやうなものを眼に泛べた。これはお久美さんの愛を象徴したものである。ぱつと鮮かに火炎の燃え上るやうな強さ——お久美さんの愛にはそんなものゝ影も見えない。が，腐った汁液（しる）が皮膚に密着（くつつ）いて離れないやうな，にちやにちやした粘り強い執着の力を持つて居る。

とあるのは，或いは森田たまを念頭においた要約であり，題名の出自でもある。だがもっと注目されるのは，葉村とお久美との交情が「或時，或はずみからついに自然の暴力に抵抗し得なかつた」ことから始まったとしている点である。これは従来，草平の恋が観念や情緒に先導され，またそこに自己をかけていたのとはひどく異なる。こうした愛の把握が，たまや或いは安香ハナへの心情にもとづくかもしれないが，それは問題ではない。一般的な本能の側面を専ら表面に引き出して来たことを重視しなければならない。しかもこの作の主題は，そうしたきっかけによる交情の中で，葉村の心を捉えたという自信を欠くにもかかわらず捨て去ることの出来ないお久美，それを「汚い」として顰蹙しつつ思慕をよせる「私」，嫉妬をおさえ難い葉村の妻などの，女性群像を描き，その中で上記の「菌のような女」お久美の情熱に一きわ光を当てたところにある。こうして前作の葉山が主題の世界の圏外にあるのとは逆に，同

じく草平に近い葉村が一見物語の中心的位置を保ちながら，結局，草平自身は作中の世界に投入されてはいないのである。ここに両作品の等質性があり，草平が「姉妹篇」とした真の根拠があったはずである。ある意味で，草平を思わせる葉山が傍系的存在である「焼跡に立ちて」よりも，同じく葉山が一見主役を演ずる「菌」の方が，より虚構に富む作品といえるのである。

こうして同じ5月17日から「大阪朝日新聞」に連載されはじめた「虚栄の女」（8月24日完結）を皮切りに，「捨児」（「婦人公論」大5・8）や「紅芙蓉」（「女学世界」大8・3～大9・4）などの通俗小説への道が開かれてくる。『虚栄の女』単行出版（春陽堂，大5・11）の際に付した「序」には，「自分はかねがね文芸の専門的な読者ばかりでなく，一般国民にもアツピールするやうな作がして見たいと願つて居た。」と書いているが，本稿でのべて来た様に，草平が世間的道徳に依拠を求めざるを得なくなって来たこと，及び直接的な個の体験をこえた世界や，トルストイに触発された様な「社会の自然の缺陥や暴力」に視線が向かいはじめたこが，上引の意図を実現し得る条件を用意したのである。（未完）

付　記

種々の事情といささか枝葉にこだわりすぎたために，最後の5章の主題「通俗小説と評論活動」の本論にも入らずに中断せざるを得なくなった。そのあと「6　漱石の死と漱石全集の編集」「7　『輪廻』の執筆」を予定していたが，あわせて後日に期したい。

1）生田長江「人として芸術家としての森田草平氏」（「新小説」大2・2）
2）「十字街」のよみ方は，拙稿「森田草平『十字街』とその前後」（「岐阜大学国語国文学」7号，昭46・2）で，「よつつじ」を正しいとしたが，草平自身が「表題としては十字街（とがい）と読んで貰ひたい」といっている（「読売新聞」大元・9・8）のを知ったので，訂正しておく。
3）イブセン「鴨」の訳は，「新小説」大正元年11・12月に分載。10月10日訳了のことは上記訳稿末尾の付記による。
4）小説「岡崎日記」による。
5）岐阜・安藤芳流氏の談話による。
6）森田草平『漱石先生と私』。同じ箇所に，親鸞上人をめぐる，漱石・草平および安藤現慶氏の間のエピソードも記されている。これらの記事は昭和22年に補入した部分で，同書の前身『続夏目漱石』にはない。
7）小説「岡崎日記」では，主人公（草平）より8才年上の39才としている。ただし草平は大正元年には数え年32才。
8）セルゲー・エリセーエフ。ロシア人留学生。明治45年東大国文科卒。漱石やその門弟たちと交遊があり，朝日文芸欄にも執筆している。小宮恒子「偲ぶ草」（弥生書房，昭45・12）で凡その経歴や業績を知った。森田たまの随筆「面影」「若き未亡人」のためににも登場する。前者は未見，後者は，「随筆貞女」中央公論社，昭12・11所収。
9）鈴木悦「四月文壇の印象」（「早稲田文学」大2・5）
10）森田草平「たは言」（「読売新聞」大2・6・29）
11）筆者は未見。伊藤孝子「森田草平」（「学苑」昭30・8）年譜による。
12）森田草平「漱石先生と私」
13）12）に同じ。伊藤整の「田村俊子『あきらめ』を書く――日本文壇史第193回」（「群像」昭44・5）によると，草平は「あきらめ」に80点をつけ，尾島菊子の作に与えた次の高点との間に20点の差をつけた。
14）瀬戸内晴美「田村俊子」（角川文庫，昭39・2による）

15）山田昭夫編「素木しづ作品集」（北書房，昭45・6）
16）内田道雄「森田たま」解説（「現代日本文学講座・評論随筆3」三省堂，昭38・4）
17）森田たま「素木しづさんの思い出」（「新潮大7・3，『随筆貞女』昭12・11による）
18） 8）参照。
19）17）に同じ。
20）森田草平「素木しづ子の追憶」（「文章世界」，大7・3。素木しづ子短篇集『青色き夢』には序文として，山田編「作品集」にも資料篇に収録）
21）20）に同じ。
22）森田節男氏（草平三男）の談話による。
23）安藤芳流氏の談話による。
24）作品集『車の音』（塚原書店，大3・5）所収の随想「女」にも同趣の言がある。
25）森田草平訳「カラマゾフ兄弟」（日月社，大4・4）所収の「ドストイエフスキイ小伝」
26）中村星湖「四月の小説」（「早稲田文学」大3・5）
27）平塚らいてう「元始，女性は太陽であった」上巻（大月書店，昭46・8）
28）林原耕三「漱石山房の人々（下）」（「季刊芸術」14，昭45・7）
29）28）に同じ。
30）堺利彦「諸君と僕」（「反響」1，大3・4）
31）生田長江「途上（評論）」（「反響」5，大3・9）
32）林原耕三「漱石山房の人々（上）」（「季刊芸術」13，昭45・4）
33）森田草平「岡崎より」（「反響」5，大3・9）
34）27）に同じ。
35）森田草平「『跑烙の刑』について青鞜にあたふ」（「反響」3，大3・7）
36）14）に同じ。
37）12）に同じ。
38）11）に同じ。
39）清水孝純「草平・漱石におけるドストエフスキーの受容」（成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』明治書院）
40）森田草平「タアニング・ポイントに立つて居る自分」（「新潮」大5・8）。後年の「漱石先生と私」にもこれに関連する回想がある。
41）同「女」（作品集『車の音』塚原書店，大3・5）。
42）吉田精一「ドストエフスキーと日本文学」（「ドストエフスキー全集・別巻」筑摩書房，昭39）
43）39）に同じ。
44）同上。
45）同上。
46）32）に同じ。
47）森田たま「神楽坂時代」（『随筆きぬた』中央公論社，昭13・7による。）
48）森田たまの南湖院入院期間は山田昭夫氏は「約一年間同地に病臥」としておられるが，森田たまの随筆「保護色夫人」（『随筆きぬた』所収による）では「二箇月ばかり」といっている。次に時期は，（注・32）の林原耕三氏文で引用の同氏あて大正3年5月11日森田たま書簡によると同日入院したように読みとれ，同18・22両日付も南湖院発信である。そして上記のたまの言の通り「二箇月ばかり」入院の後，（注・47）の「神楽坂時代」にいうとおり，「湘南の病院から死に損なひの恥さらしな身体」を神楽坂の家に運んで「二十一（＊大正3年）の夏から二十二の夏まで，ちゃうどまる一年間」の「神楽坂時代」がつづいたとして，辻褄があう。しかしたまの帰郷を報じた時事新報記事掲載の大正4年8月4日までに，入院中の南湖院からの退院と北海道帰郷があったのは事実だろうから，結局，「神楽坂時代」の後に，というよりそのために健康を害して再び短時日入院したという推定も成り立つ。とすれば草平の「焼跡に立ちて」の，葉山（＊草平）の稲毛・海気館滞在は,事実は「神楽坂時代」以前

の一回目の入院直前であるのを，以後の再入院の直前に配したのであろう。
49）15）所収の「素木しづ白描」より引用。

＊小宮豊隆あて草平書翰は，小宮恒子夫人から借覧を許されたものである。